

# 新羅積石木槨墓の埋葬プロセス

## 皇南大塚を中心に

Burial Process of Wooden-chambered Cairns in Silla:  
Focusing on Hwangnamdaechong Tomb

高久健二

TAKAKU Kenji

はじめに

- ① 積石木槨墓に関する近年の研究—構造論を中心に—
- ② 皇南大塚の築造工程および埋葬・儀礼行為
- ③ 大型積石木槨墓における埋葬プロセスの総合的復元と考察

結語

### 【論文要旨】

本論文は韓国慶尚北道慶州市に位置する皇南大塚の築造工程と古墳で執り行われた埋葬・儀礼行為を検討することによって、5世紀代の新羅の大型積石木槨墓における埋葬プロセスを総合的に復元し、その特徴と意義について考察したものである。皇南大塚を検討した結果、大型積石木槨墓の埋葬プロセスは大きく3段階にわたって進行したことが明らかとなった。まず、第1段階は1次墳丘と埋葬主体部の構築、および被葬者の埋葬、副葬品の埋納行為が行われる段階であり、木槨の構築、木槨側部積石部の構築、1次墳丘の構築が同時併行で行われたものと推定した。また、この第1段階には被葬者の埋葬行為にともなう古墳築造の中断面が存在し、大型積石木槨墓は被葬者の埋葬行為が築造工程の過程で行われる「同時進行型」古墳であることを示している。第2段階は1次墳丘の密封行為が行われる段階であるが、その最後に儀礼が行われた古墳築造の休止面が存在しており、1次墳丘上面が埋葬プロセスにおける重要な儀礼の場であったことを示している。第3段階には2次墳丘の構築が行われており、古墳構築の最終段階の工程と儀礼が行われる段階である。積石木槨墓は埋葬行為が行われる段階には、すでに1次墳丘が築かれており、地下式木槨墓のような典型的な「墳丘後行型」古墳とは、埋葬・儀礼行為が行われる場が異なっていた。また、皇南大塚南墳と北墳は相互に継承関係があることは明らかであるが、南墳と北墳の被葬者が夫婦である可能性は低く、5世紀代の新羅では夫婦合葬が普及していなかったと推定される。大型積石木槨墓は原三国時代後期から続く木槨墓の最終形態であるとともに、厚葬墓の頂点に位置づけられる墓制である。皇南大塚南墳は古墳規模や副葬品の質・量だけでなく、埋葬プロセスの複雑性においても大きく飛躍しており、皇南大塚南墳が新羅王陵の出現を、北墳がその確立を示している。

【キーワード】 積石木槨墓、皇南大塚、埋葬プロセス

## はじめに

朝鮮半島東南部の嶺南地域では、2世紀後半に大型木槨墓が出現し、その後、各地の首長墳に木槨墓が採用されていく。加耶地域では5世紀に入ると竪穴式石槨墓がしだいに普及していくが、慶尚南道陝川郡玉田古墳群のように、5世紀末まで木槨墓が残る地域もある〔チョヨンヂェ 2007〕。一方、新羅の慶州地域では木槨墓の周囲や上部に積石をもつ積石木槨墓が4世紀代に出現し、6世紀前半まで王族の古墳として存続していく。これら木槨墓や積石木槨墓は「墳丘後行型」の墓制とされ、榮山江流域にみられるような「墳丘先行型」の墓制とは埋葬プロセスが大きく異なっている<sup>(1)</sup>。木槨墓は樂浪郡の古墳にみられるように、とくに上位階層で長期間にわたり採用された厚葬墓であり、多くの文物を副葬するだけでなく、複雑な埋葬プロセスをとる墓制である。筆者は樂浪郡の大型木室墓である南井里116号墳(彩篋塚)を検討し、上位階層における埋葬プロセスを明らかにした〔高久1999〕。新羅の積石木槨墓も厚葬墓であり、とくに5世紀代の王族の古墳と考えられる大型積石木槨墓では一般の墳墓より複雑な埋葬行為が行われていたものと推定される。これら新羅の大型積石木槨墓における埋葬プロセスを明らかにすることは、隣接する加耶地域だけではなく、木槨墓がほとんど採用されることがなかった倭の古墳との比較研究においても重要な意味をもつものと考えられる。4世紀後葉になると嶺南地域と日本列島の古墳において、いわゆる中期古墳的性格が強くなり、武器や馬具の副葬など副葬品においても両地域で類似性がみられるようになる〔チュジョンギョ 1983〕。このような物質資料の共通性だけでなく、古墳で執り行われた諸行為の類似・相違点を検討することによって、倭の古墳文化の特質を明らかにすることにもつながるであろう。

本稿では、まず韓国における近年の積石木槨墓研究、とくに築造工程などの構造論に関する研究を中心に整理し、その問題点および研究の視点を抽出する。次にこれを踏まえて、新羅初期の大型積石木槨墓である皇南大塚南墳・北墳について、あらためて発掘調査報告書のデータを検討して埋葬プロセスの復元を行う。最終的にこれら大型積石木槨墓の埋葬プロセスについて総合的に検討し、その特質と意義を明らかにしたい。

### ①……………積石木槨墓に関する近年の研究—構造論を中心に—

新羅の積石木槨墓に関する調査・研究は、すでに解放前から行われている。1921年の金冠塚〔濱田ほか1924・1927〕、1924年の飾履塚と金鈴塚〔梅原1931・1932〕、1926年の瑞鳳塚〔小泉1927、パクデンイルほか2014〕などの調査成果をもとに、槨室と墓壙間に石を詰め、上部にも積石を行い、積石上部を粘土で被覆した後に墳丘を構築するという、積石木槨墓の基本構造が認識されるにいたった〔梅原1947〕。解放後も1946年の壺杆塚の調査をはじめとして、積石木槨墓の調査が行われたが、1973～1975年に慶州観光総合計画の一環で行われた天馬塚、皇南大塚北墳・南墳の発掘調査を契機として、大型積石木槨墓の構造に関する理解が深まっていった。天馬塚の報告書が1974年に〔キムウォルリョンほか1974a〕、皇南大塚北墳の報告書が1985年に〔キムジョンギョほか1985〕、皇南大塚南墳の報告書が1994年に刊行され〔キムジョンギョほか1994〕、1990年代前半までに調査資

料がすべて公表された。チェビョンヒョン（崔秉鉉）は、これら1990年代以前の調査資料を網羅的に検討し、積石木槨墓の型式分類・編年を行い、その変遷過程・起源と出現背景について考察した〔チェビョンヒョン1981・1992〕。その結果、皇南大塚南墳の年代を4世紀中葉まで引き上げ、積石木槨墓の起源を北方シベリアのクルガン文化と結びつける、いわゆる「北方起源説（外來說）」を提示した。チェビョンヒョンの年代観には批判も出されたが〔シンギョンチョル1985〕、1990年代前半までにおける積石木槨墓研究の到達点を示すものといえる。一方、カンイング（姜仁求）も積石木槨墓について墳型と埋葬主体部の類型分類を行い、その系譜について検討している〔カンイング1981・1991〕。カンイングは、新羅の積石木槨墓は高句麗の積石塚が伝播して、既存の木槨墓と合体し、そこに墳丘が加わって成立したとする、いわゆる「高句麗積石塚起源説」を主張した。このように積石木槨墓の系譜については、1990年代初頭まで「北方起源説」と「高句麗積石塚起源説」が拮抗していた。

その後、慶州以外の地域における発掘調査事例の増加に伴い、1990年代後半になると、積石木槨墓に対する研究は大きな転機をむかえる。以下、近年の韓国における積石木槨墓研究の現状を把握するため、1990年代後半以降の研究成果を中心に論点を整理してみる。

イソンチュ（李盛周）は蔚山市中山里遺跡の発掘調査資料をもとに、辰韓後期～新羅前期墓制の変遷過程、および積石木槨墓を含む新羅前期古墳の特徴について検討した〔イソンチュ1996〕。その結果、墓壙形態、墓槨築造方法、補強積石、護石、墳丘などの特徴から「新羅式木槨墓」を定義し、木槨・積石封墳・高大な墳丘などから構成される新羅最高位の積石木槨墓を新羅式木槨墓の系統と範疇内にある特殊な墓制であるととらえた。すなわち、辰韓後期から新羅前期にかけての墓制の変遷過程をはじめて明らかにし、4世紀前半に現れる新羅式木槨墓が発展していく過程の中で積石木槨墓が出現したとする、いわゆる「自生説」を主張した。

イヒヂュン（李熙濬）は慶州市月城路 ka-13 号墳の絶対年代を論じ、その意義について、新羅の積石木槨墓の構造と威信財の変化に着目して検討している〔イヒヂュン1996〕。積石木槨墓の構造について、木槨と墓壙の間の四方に積石を行い上部には積石がない「四方積石式」、木槨と墓壙の間および木槨上部にも積石をもつ「上部積石式」、地上式の積石木槨墓である「地上積石式」に分類した。また、四方積石式には完全な地下式と一部上部地上式があるが、上部積石式は半地上式のみであり、出現順序を、地下四方積石式（月城路 ka-13 号墳）→上部一部地上四方積石式（皇南洞 110 号墳）→上部積石式・地上積石式（皇南大塚南墳）ととらえる。すなわち、積石木槨墓は外部から入ってきた墓制ではなく、完成した構造のものが突然現れたものでもないとする、「自体発展説」を提示した。とくに、木槨上部に積石がない「四方積石式」を積石木槨墓の範疇に含め、より広い概念で積石木槨墓をとらえる点が特徴といえる。これらイソンチュとイヒヂュンの研究により積石木槨墓の系譜については「自生説」が優勢となり、「四方積石式」を積石木槨墓に含めるか否かという、積石木槨墓の概念をめぐる議論が展開するようになる。

これらイソンチュおよびイヒヂュンの見解に対し、北方起源説をとるチェビョンヒョンは、慶州中心部および周辺部では木槨部に積石をもち護石をめぐる古墳と土壙木槨墓が相当な期間併存していたととらえ、土壙木槨墓から積石木槨墓へという変化の図式には問題があるとする〔チェビョンヒョン2000〕。また、皇南大塚南墳を最初の最上位階層の大型積石木槨墓とすることも問題であり、

月城路 ka-13 号墳以前にも中・小型積石木槨墓と併行して、まだ発見はされていないが最上位階層の大型積石木槨墓が存在したとみるべきであると指摘した。すなわち、四方積石式→上部積石式・地上積石式という変化は成立しないとして、土壙木槨墓から積石木槨墓の変化を単に内部的な発展として解釈はできないと主張し、北方起源説の可能性を残している。

イウンソク（李恩碩）は皇南大塚南墳・北墳の築造方法と埋葬形態の検討を通して、墓槨構造と殉葬について考察している [イウンソク 1999]。皇南大塚では櫓状建造物<sup>(2)</sup>を構築して積石部を築造しているが、後出する天馬塚では櫓状建造物を用いず、墳丘構築と同時に下部積石部の構築が行われており、技術的な発展が認められるとする。また、木槨上部に配置された装身具は、被葬者周辺に埋葬された殉葬者の着用品と見なすべきであるとして、皇南大塚南墳の場合は木槨上部に4～5人、皇南大塚北墳の場合は約6人、天馬塚の場合は約4人の殉葬者が埋葬されていたと推定している。さらに、木槨周囲に配置された石壇は殉葬者の屍床台と推定し、皇南大塚南墳と北墳では各2人、天馬塚では1人が殉葬されていたとする。したがって、慶州地域の積石木槨墓内には相当数の殉葬者が埋葬されていたとみており、大型積石木槨墓の埋葬プロセスでは主被葬者の埋葬行為だけでなく、殉葬行為も重要な意味をもっていたことを指摘した。

チョヨンヒョン（曹永鉉）は皇南大塚南・北墳と天馬塚の報告書における層位の解釈を再検討し、墳丘盛土における区画築造方法を復元している [チョヨンヒョン 2002]。まず、皇南大塚南墳において、墳丘周縁部の河原石層が下方に傾斜しているが、内側の層はほぼ垂直に下っていることから、これらはいずれも垂直の石列であり、放射状の区画石列であると解釈している（図4・5）。すなわち、報告書では積石部上面より上は周縁部をまず高く盛った後に、高い周縁部から低い中心部へと土と礫を交互に内側に傾斜するように盛り上げていったとされているのに対し、区画盛土法<sup>(3)</sup>によって水平盛土法で築造されたと解釈した。また、積石部の密封層には石列が見られないので、石列区画<sup>(4)</sup>は積石部を密封層で覆った後に上部の盛土の過程で設置された可能性が高いとする。ただし、区画石列数は45列前後であり、櫓状建造物の横架木の列数と類似することから、積石部と上部盛土の区画がつながっていた可能性があるとする。皇南大塚北墳についても、上部の盛土は水平盛土法によって放射状に区画築造されたと解釈し、区画数は南墳より少ない32区画であったと推定している。また、下部積石とその外側の盛土との関係については、木槨床面から3mまでは積石部を構築した後に外側に盛土を行っているが、それより上の部分は積石と盛土の境界線が垂直になっていることから両者が同時に構築されたと推定している（図19）。天馬塚の場合も放射状に区画築造されており、区画数は皇南大塚北墳よりもさらに少なかったものと推定し、時期が下るにつれ区画数が減ることを明らかにした。三次元の視角から墳丘盛土の層位を解釈することの重要性が強調されており、チョヨンヒョンによる墳丘構築方法に関する一連の研究成果によって [曹永鉉 2003]、韓国における墳丘調査方法が発展していったといっても過言ではない<sup>(5)</sup>。

キムデファン（金大煥）は積石木槨墓の概念定義を行ったうえで、とくに嶺南地域の積石木槨墓に着目して、時空的変遷について検討している [キムデファン 2001]。まず、積石木槨墓の分類については、木槨と積石施設を主要属性とし、四方積石木槨墓、上部積石木槨墓、地上積石木槨墓に分けている<sup>(6)</sup>。そして、地上積石木槨墓と積石封土墳を統合する用語として「積石木槨墳」を用い、四方積石木槨墓・上部積石木槨墓と封土墳を統合した用語として「積石木槨墓」を用いるとしてい



<sup>(7)</sup> 次。次に積石木槨墓の時空的変遷については、発生期、成立期、拡散期、発展期、消滅期の五時期に分け、このうち拡散期（4世紀後半～5世紀前半）に嶺南地域に広がったとみる。嶺南地域への積石木槨墓の拡散現象は、通時的には新羅と政治・経済的関係をもつ特定拠点への拡散、さらにその拠点からの拡散にとらえ、共時的には慶州地域内部の階層性による内的拡散と、慶州地域から嶺南地域への外的拡散に分かれて進行したと解釈している。また、積石木槨墓の拡散様相は、受入地域の性格、墳墓の階層性の違いなどによって異なることも指摘している。基本的にはイヒヂェンによる研究を継承するものであるが、嶺南地域の積石施設をもった木槨墓を積石木槨墓にとらえ、積石木槨墓の範疇を広げることによって、嶺南地域全体に積石木槨墓が分布することを主張した点が注目される。これは積石木槨墓の概念を最も広くとらえる見解であり、あらためて積石木槨墓の定義をめぐる議論が展開する契機となった。

キムヨンソン（金龍星）は天馬塚と皇南大塚の墓制と墓形を復元し、地上式埋葬施設をもつ積石封土墳の築造過程・構造・変化・意義などについて検討した〔キムヨンソン 2007〕。まず、地上積石式封土墳は、①墳丘底部の整地、②木槨の築造と側壁積石部・下部墳丘・護石の築造、③木槨の下棺、④木槨蓋部（上部）の積石と密封、⑤上部墳丘の築造と密封の5工程をへて築造されているが、③木槨の下棺を境として、前後の工程に分けられるという。すなわち、下部墳丘、積石側壁部、護石部、木槨などの下位構成要素が完成し、一定期間経過した後に納棺が行われ、さらに木槨上部の蓋部積石と密封、上部墳丘の築造と密封が行われたととらえている。天馬塚における下部積石と蓋部積石の間に貫入した砂質土層の存在から、相当な期間が経過した後に蓋部積石が覆われたものと推定し、被葬者の生前に木槨を含む前半段階の工程がすでに完了していたと考えている<sup>(9)</sup>（寿陵説）。また、遺物の出土状況などからみて、築造場所の整地、下部構成要素である木槨・積石側壁部・護石・下部墳丘の完成、木槨内木槨の下棺、木槨蓋部の完成、木槨蓋部積石の完成と密封、上部墳丘の完成・密封などの工程ごとに儀礼行為が行われたと指摘している。さらに、イウンソクと同様に木槨上部に副葬された遺物を殉葬者のものととらえ、皇南大塚南墳では5人以上、皇南大塚北墳では8人以上、天馬塚では4人以上の殉葬者が埋葬されていたと推定している。一方、埋葬施設の構造については、皇南大塚南墳の場合は「木槨」といえるが、皇南大塚北墳と天馬塚の場合は、廻廊のような構造をもち、空間にかなりの余裕があることから「木室」に近いとする<sup>(10)</sup>。これらの木室は高句麗積石塚の木室墓と関連があり、在地的な槨墓に外部から入ってきた室墓的な要素が加味されて築造されたものと考えている。築造工程とそこで行われた埋葬行為を復元している点が注目され、「自生説」と「外来説」を合わせて解釈している点も特徴といえる。

イヂェフン（李在興）は自生説の立場から、木槨墓から積石木槨墓への転換過程について検討している〔イヂェフン 2007〕。まず、積石木槨墓の主要構成要素である積石、二重槨、礫石屍床、石壇施設は、すでに前時期の木槨墓においてその始原的形態が現れているとする。また、積石木槨墓の前身である慶州地域の囲石式木槨墓は、河床堆積層が発達した扇状地内の平地に現れており、河原石や礫を利用しやすい環境にあったことも囲石式木槨墓や積石木槨墓出現の要因であったとみている。

キムドゥチュオル（金斗喆）は慶州の積石木槨墓の構造的特徴を再検討し、四方積石式に関する問題点を考察している〔キムドゥチュオル 2009〕。まず、積石木槨墓の構造的な特徴は木槨、積石、外護石、

円形墳丘であり、このうち、もっとも重要な要素は上部積石と護石であるとする。慶州の積石木槨墓が地上化する傾向を示すのに対し、上部積石をもたない四方積石木槨墓とされる福泉洞31・32号墳や林堂洞G-5・G-6号墳はいずれも地下式の埋葬主体部であることから、両者の関連性は低いとみている。また、皇吾洞100遺跡を検討し、積石木槨墓の築造工程を以下のように復元している。

〔第1工程：第1次墳丘の構築〕

- ① 遺構全体の整地作業を行う。
- ② 主・(副) 槨の位置を決め、そこに浅い堅穴(墓壙)を掘る。
- ③ 主・(副) 槨の墓壙を基準に封土の範囲・護石の位置を決める。
- ④ 内部の堅穴部分を空けて、その外側と護石の間に水平あるいは凸レンズ形に第1次墳丘を盛る。
- ⑤ 第1次墳丘の裾部に護石を積む。
- ⑥ 墓壙とその周辺を整備する。

〔第2工程：埋葬主体部の設置と上部積石の構築〕

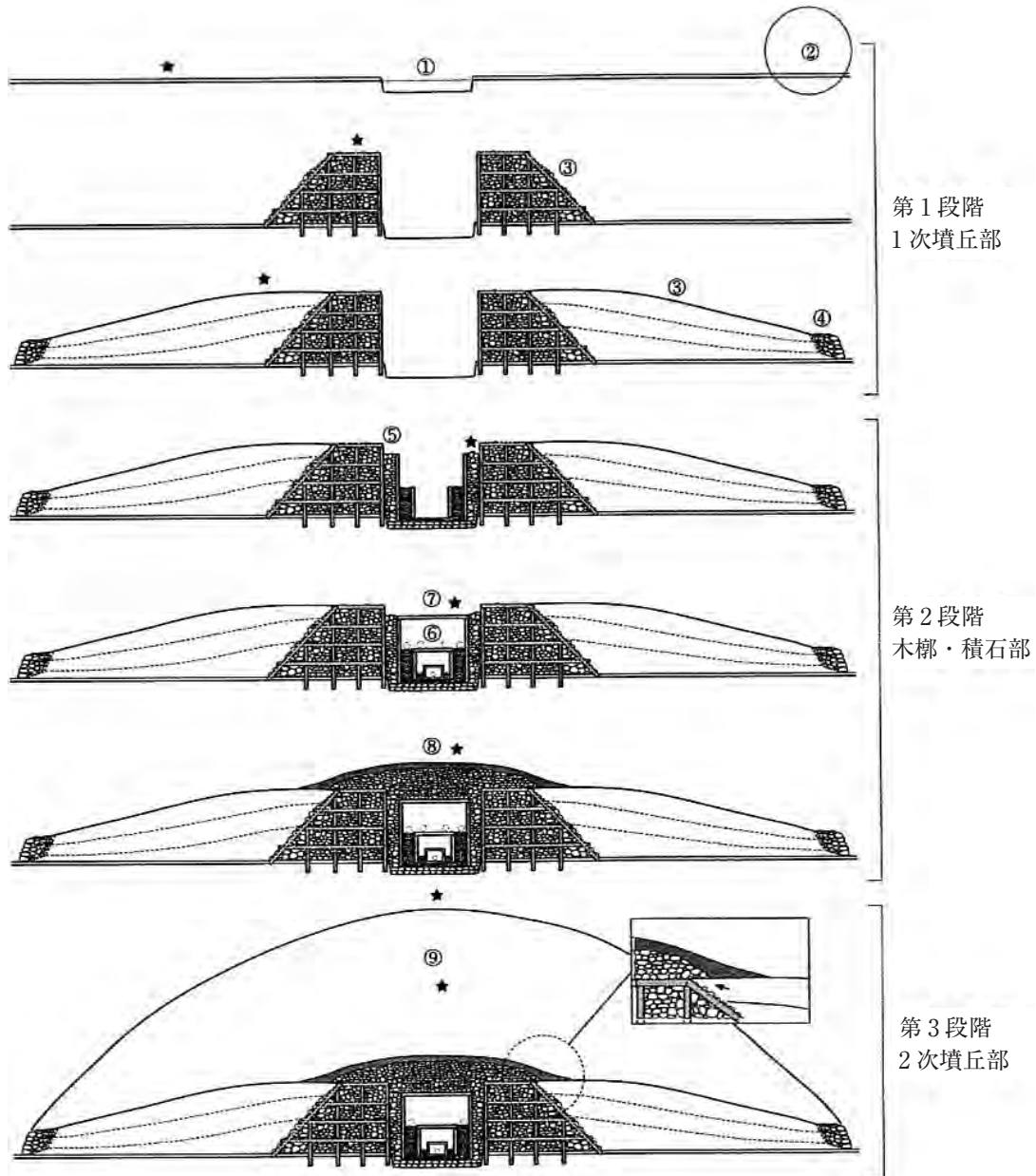
- ⑦ 墓壙内に木槨を設置する。
- ⑧ 被葬者と棺を安置し、副葬品を配置する。
- ⑨ 木槨の蓋を閉じる。
- ⑩ 木槨と墓壙および第1次墳丘の間に石を詰める。
- ⑪ 木槨上部に石を積み密封する。

〔第3工程：第2次墳丘の構築〕

- ⑫ 全体に土を盛って第2次墳丘を構築する。

このような中小型積石木槨墓の構築方法は、皇南大塚のような大型積石木槨墓にも適用でき、第1次墳丘が木槨よりも前に構築される点、木槨と側壁部積石の間に四周積石が詰め込まれた後に上部積石を積み上げる点などは、中小型古墳と共通するとする。また、積石木槨墓の系譜については、自生説を支持するが、高句麗からの間接的な影響を受け、これを独自化することによって、慶州の積石木槨墓が出現したととらえる。慶州における積石木槨墓の出現は、嶺南地域における高塚墳の出現の契機となるが、これをすべて政治的要因と解釈することは問題であると指摘する。積石木槨墓の築造工程を詳細に復元しており、とくに第1次墳丘を構築してから、内部に木槨を設置したとみている点が注目される。上部積石と護石を重視し、四方積石木槨墓を積石木槨墓ととらえることに問題があるとする点、「自生説」を支持しつつも外部からの影響を想定する点などが特徴である。

シムヒョン Chol (沈炫暉) は、前述したキムドゥ Chol の研究成果をもとに、慶州の積石木槨墓の類型分類を行い、各類型の構造と築造方法を復元し、積石木槨墓築造の意義を構造的に解明しようとした。また、積石木槨墓の構造と出土遺物を総合的に分析し、積石木槨墓築造社会の階層構造を検討した [シムヒョン Chol 2012・2013]。まず、時間的変化が反映される木槨部と、墳墓の規模を示す墳丘部に分けて分類し、これらの組合せによって類型分類を行い、合計29類型を抽出した。次に、墳丘部の規模と形態による分類単位である、小型墓(A1類、A2類)、小型墳(B類)、中型墳(C類)、大型墳(D類)の特徴と性格について論じた上で、B・C・D類の築造工程を以下のように復元している(図1)。



【第1段階】	【第2段階】	【第3段階】
①墓域整地・墓壙掘削	⑤木槨・四周積石設置	⑨2次墳丘築成
②墳丘範囲設定	⑥遺物副葬・被葬者安置	★儀礼関連遺物出土 予想地点
③1次墳丘築成	⑦木槨密封	
④護石設置	⑧上部積石・密封粘土	

図1 シムヒョン Cholによる積石木槨墓(大型墳:D類)の築造工程の復元

〔第1段階：1次墳丘部築成〕

- ① 墓域を整地し、埋葬主体部を設置する部分に浅い墓壙を掘削する。
- ② 墓壙を基準に封土の範囲を設定する。
- ③ 墓壙と護石の間に一定の高さの1次墳丘を築成する。
- ④ 1次墳丘の外縁部に護石を積み上げる。

〔第2段階：木槨・積石部設置〕

- ⑤ 木槨を設置しつつ、木槨の外側に石を充填する（四周積石）。
- ⑥ 墓壙床面に屍床を構築して被葬者（木棺）を安置し、副葬品を配置する。
- ⑦ 木槨の蓋を覆う。
- ⑧ 木槨上部に積石を行い、粘土で密封する。

〔第3段階：2次墳丘部築成〕

- ⑨ 完全に密封した埋葬主体部の上に2次墳丘を盛り、墳丘を完成させる。

墳丘は、木槨設置前に造られる1次墳丘と埋葬主体部密封後に造られる2次墳丘の2段階に分けて築造され、その間に木槨と積石部が設置されるので、墳丘の築造には一定の時間差が存在すると指摘する。また、これらの築造工程は積石木槨墓の類型に関係なく、共通しており、同じ墓制として定義できるとする。また、積石木槨墓の構造力学的特徴についてもふれ、木槨上部にかかる墳丘圧の大部分は、アーチ形を呈する上部積石によって、周辺に分散され、四周積石と1次墳丘側に拡散すると推定している。積石木槨墓の階層構造については、墓壙の規模と出土遺物から5等級に分けられ、1等級は王と王族、2等級は王系貴族の上位階層、3・4等級は王系貴族の低位階層、5等級は貴族以下の身分と想定している。積石木槨墓は新羅の支配階層を中心に完成された墓制であり、これを通じて強い政体を表出しようとしたとする。シムヒョンチョルによる築造工程の復元は、基本的にキムドゥッチョルの見解を踏襲しているが、積石木槨墓の類型分類を行い、総合的に工程を復元している点、1次墳丘と2次墳丘築造の間に一定の時間差が存在するとみる点、構造力学的特徴について考察している点、階層性との関連を検討している点などが特徴である。現在までの積石木槨墓研究の一到達点を示す研究として注目される。

以上、近年の韓国における積石木槨墓の構造論に関する研究を整理してみたが、積石木槨墓の築造工程に関する研究がかなり進展していることがわかり、大型積石木槨墓がどのような過程を経て築造されたのかがほぼ明らかにされているといえる。また、キムヨンソンによる研究のように、積石木槨墓の築造工程とそこで行われた埋葬行為について論じたものもみられる。さらに、近年、チョクセム遺跡の発掘調査 [パクジョンイクほか2010]、金冠塚の再発掘調査・資料整理、瑞鳳塚の報告書刊行 [パクジンイルほか2014]、皇南大塚や天馬塚の特別展開催 [ハムスンソプほか2010、リュジョンハンほか2014]なども積石木槨墓研究の進展を後押ししている。本稿ではこれらの研究をさらに進めることを目的として、より詳細な埋葬プロセスの復元を試みる。埋葬プロセスの復元作業においては、墳丘や埋葬主体部などの築造工程と、古墳で執り行われた埋葬・儀礼行為の双方を分析することによって、古墳の築造工程のどの段階で、どのような葬送行為が行われたのかを明らかにしたい。築造工程と埋葬・儀礼行為は不可分の関係にあることはいままでもなく、相互に有機的関係をもっていたことが想定される。すなわち、単に築造工程に合わせて、埋葬・儀礼行為が行われた



のではなく、埋葬・儀礼行為が築造工程を規定する部分もあったのではないかと予想される。築造工程と埋葬・儀礼行為を総合的に分析することによって、これまでの見解とは違った埋葬プロセスを提示できるのではないかと考える。

## ②……………皇南大塚の築造工程および埋葬・儀礼行為

これまでの積石木槨墓の研究成果をふまえて、つぎに、皇南大塚南墳・北墳の発掘調査報告書のデータと所見をもとに、その築造工程と埋葬・儀礼行為について復元を試みる。皇南大塚（皇南洞98号墳）は慶州の中心古墳群である皇南洞古墳群に位置しており、西側には天馬塚が、北側の路西洞・路東洞古墳群には金冠塚、瑞鳳塚、金鈴塚など、5～6世紀の積石木槨墓が分布している（図2）。皇南大塚は慶州観光総合計画の一環で、天馬塚とともに1973年から1975年にかけて発掘調査が行われ、1975年に北墳の概報が[文化財管理局1975]、1976年に南墳の概報が刊行された[文化財管理局1976]。本報告は1985年に北墳が[キムジョンギほか1985]、1994年に南墳が刊行されてい

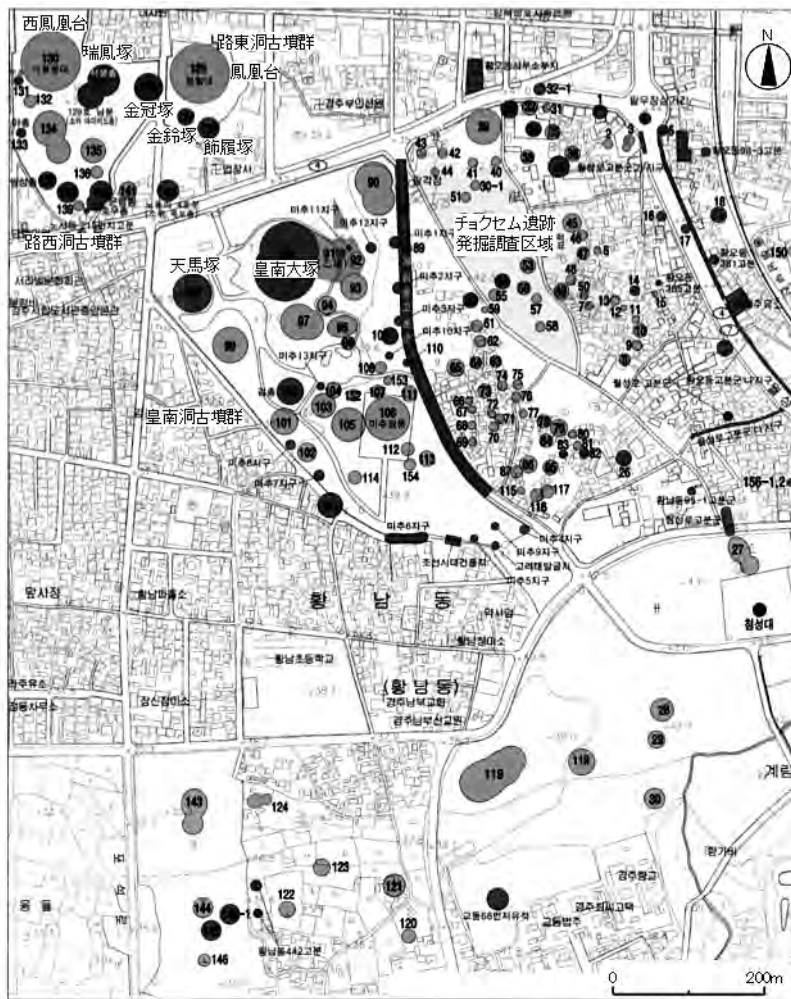


図2 慶州市中心部における古墳分布図

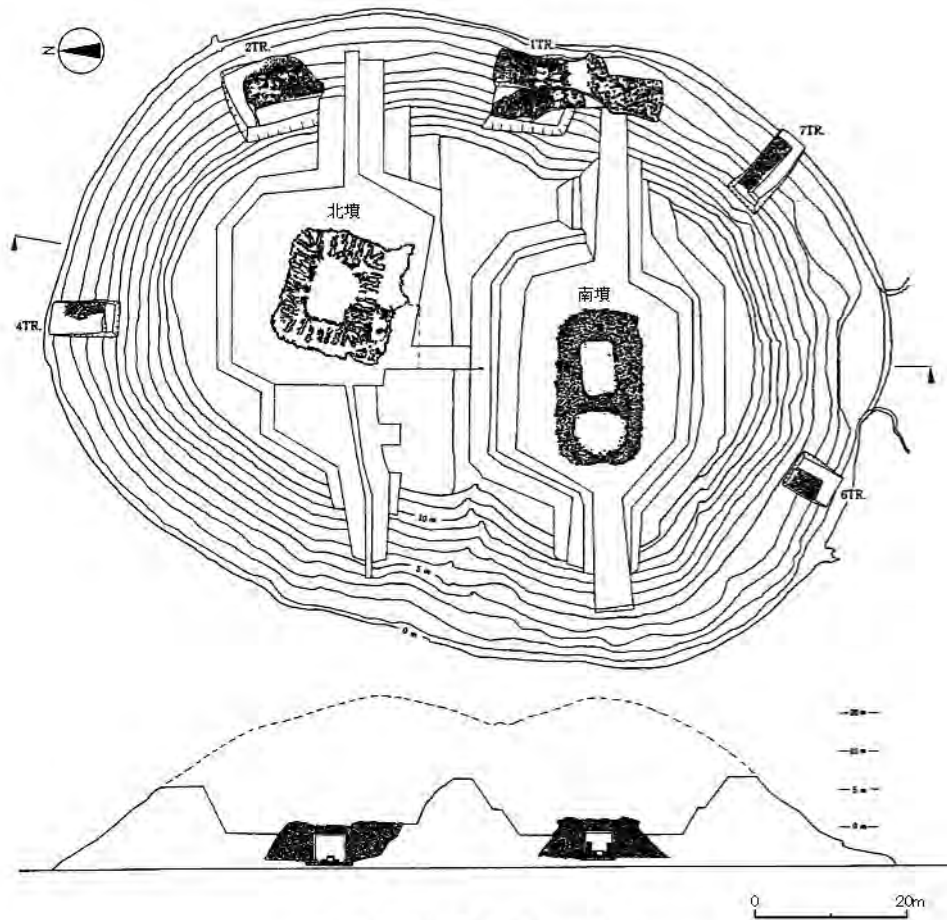


図3 皇南大塚の墳丘(瓢形墳)

る [キムヂョングほか1994]。皇南大塚は2基の円墳が合体した瓢形墳であり、南北長114m、東西82m、高さ23mである(図3)。先に南墳が築造され、その後、南墳の墳丘の一部を除去して、北墳が造られた。

## 1 皇南大塚南墳

### (1) 築造工程

最初に造られた南墳の築造工程については、発掘調査報告書のデータを検討した結果、以下のとおり①～⑩に分けることができる。基本的に築造工程は①から⑩へと進行したものと推定されるが、一部併行して行われた工程もある。

#### ①古墳基底部の構築

積石部下の土層は、地表面上1.04mまでが黄褐色粘土層であり、その下は赤褐色土層であった。後者の赤褐色土層は非常に硬く、約30cm間隔で小礫の薄い層があった。したがって、地山上に一定の高さまで赤褐色土を小礫と交互に敷き固めて、その上に黄褐色粘土層を20～30cm敷いて、古墳の基底部を形成したものとみられる。

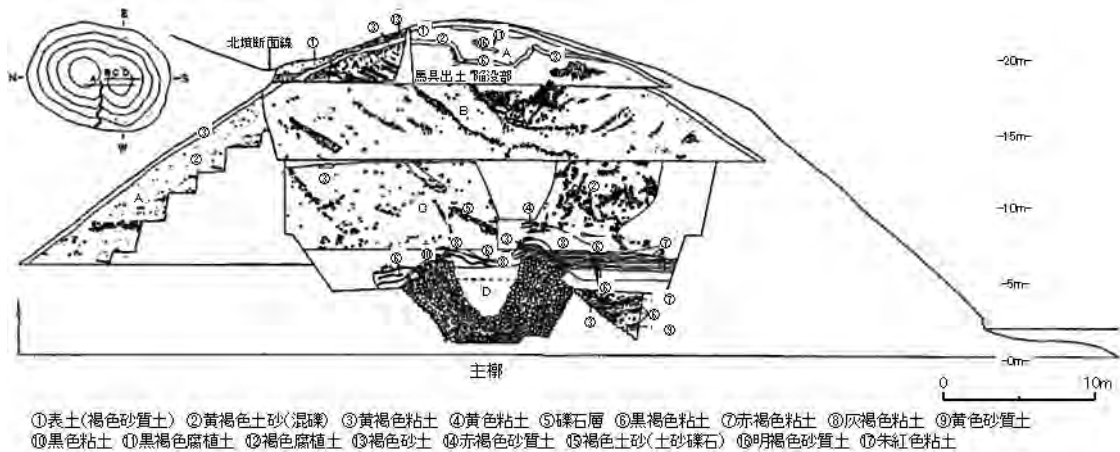


図4 皇南大塚南墳の墳丘断面図(南-北)

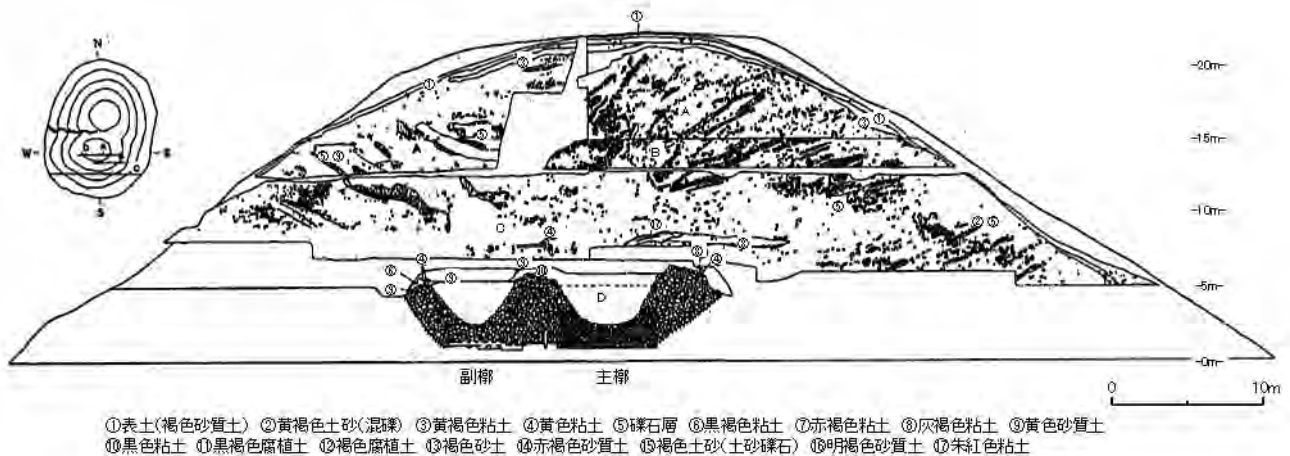


図5 皇南大塚南墳の墳丘断面図(東-西)

## ②墓壇の掘削

基底部に主槨と副槨を配置する浅い墓壇をそれぞれ掘削する。主槨の墓壇は深さ45cmであり、基底部の黄褐色粘土層を過ぎて、その下の赤褐色土層と小礫層の一部まで掘り込まれている。副槨の墓壇床面は基底部の黄褐色粘土層の下にある赤褐色土層の上面をそのまま利用している。

## ③木槨の構築

南墳の木槨は主槨と副槨が東西に並ぶ主・副槨式である(図5)。まず、主槨の構造は外槨、中槨、内槨の三重槨を呈するが、墓壇内に河原石が2~3層に敷かれ、その上に外槨(東西6.5m、南北4.1m)の側壁が構築されている(図6-1)<sup>(12)</sup>。外槨の内側にはさらに小礫を敷いて、外槨の床面(厚さ20cm)としており、底板はない。床面には赤色顔料が塗布されていた。外槨の内側には90cmの間隔をおいて、床面の小礫層上に中槨(東西4.7m、南北2.3m)が設置されているが、外槨と同様に底板は伴わない。中槨と外槨の間には、少なくとも木槨床面から1.8mの高さまで小礫が詰め込まれていた。中槨の天井は明確ではないが、小礫の上面にあったものと推定されている。中槨・外槨の側壁にそって、多くの鏝が出土していることから、木槨は鏝で固定されていたと推定されている。中槨の中に内槨(東西3.6m、南北1.0m)が設置されているが、中槨と内槨の間には小礫を



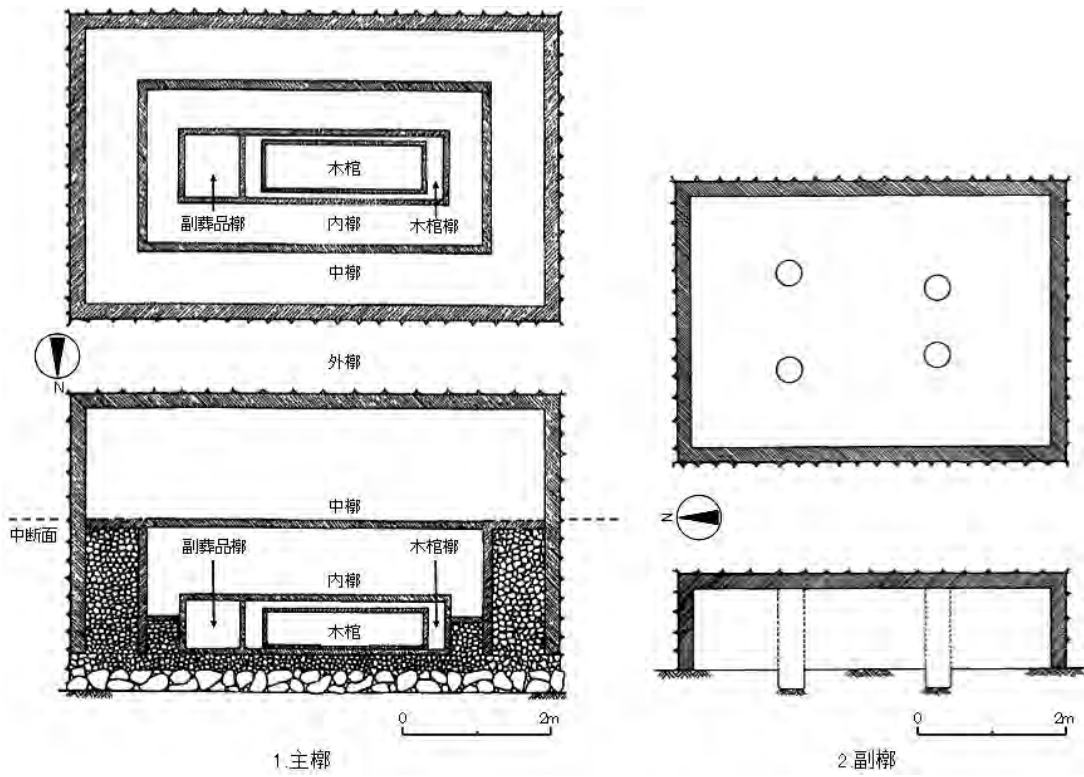


図6 皇南大塚南墳の木槨

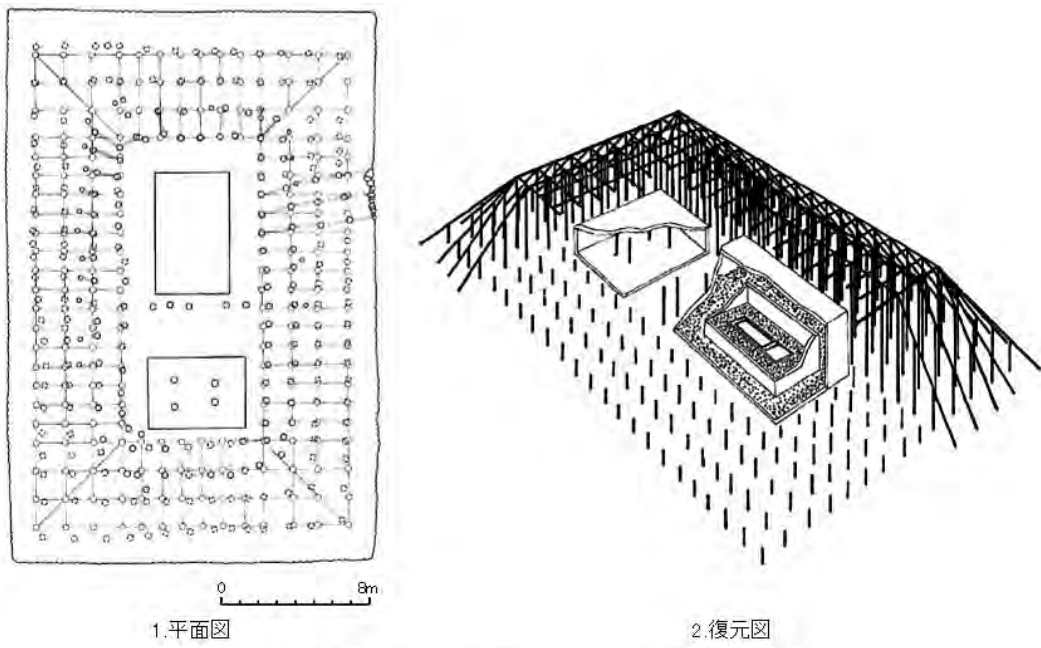


図7 皇南大塚南墳の木槨側部積石部櫓状建造物



詰め込んで石壇（高 50cm）を構築し、石壇上面には板材が敷かれていた。内槨の内部は東側の副葬品槨（長さ 80cm）と西側の木棺槨（長さ 2.8m）に仕切板で分けられている。内槨は底板をもっており、内面には赤色顔料が塗布されていた。

このように主槨は、外槨の内側に小礫を敷いて、その上に中槨や内槨を設置していることからみて、外槨→中槨・内槨の順に構築されたものと推定される。しかし、外槨の高さは床面から 3.5m にも達することからみて、外槨をすべて構築した後に、その内部に中槨や内槨を設置するのは不可能ではないにせよ、難工事となる。したがって、河原石層の上に外槨の下部を構築し、床面に小礫を敷いたのちに、中槨・内槨の構築が同時併行で行われた可能性が高い。また、外槨・中槨間の小礫層、および中槨・内槨間の石壇も順次構築されていったと考えられる。

次に副槨（南北 5.2m、東西 3.8m、高さ 1.3m）の構造は一重槨であり、床面は墓壙底部である赤褐色土層上面をそのまま利用しており、底板は伴わない（図 6-2）。副槨の床面中央部に直径約 30cm、深さ約 25cm の木柱 4 本を立てて、木槨の天井材を支えていたものと推定される。主槨の構築と併行して副槨の構築も行われたものと考えられる。

#### ④木槨側部積石部の構築

木槨側部に石を積み上げる前に、まず古墳基底部に 4 重に約 50cm の柱穴を掘り、木柱（直径 25～30cm）を打ち込んで、木柱の間に角材を縦横につなげて櫓状建造物を構築した（図 7）。櫓状建造物は東西 27.2m、南北 19.7m、高さ 4.1m の断面台形を呈していた。この櫓状建造物に合わせて積石を行うが、内側から 2 列目までは上部を水平に、2 列目から最外列の外側 1.5m までは約 42 度の傾斜で河原石を積み上げている。したがって、木槨側部の積石の形態は平面形が長方形で、断面形が台形を呈している（図 3・4・8）。また、櫓状建造物に伴う積石部と外槨の間にも石を詰めている。

#### ⑤ 1 次墳丘の構築

墳丘は、積石部上面より下部の 1 次墳丘と、積石部上面より上部の 2 次墳丘<sup>(13)</sup>に区分される。まず、1 次墳丘が構築され、木槨内部の埋葬と上部積石部の築造が終了した後に 2 次墳丘が構築された。1 次墳丘は、小礫層を挟みながら、小礫が多く混入した黄褐色土を水平に積み上げている（図 4）。また、1 次墳丘の外側にめぐらされた外護石は、基底部に 1 次墳丘の構築とともに設置されたと推定されている。報告書では、木槨側部積石と 1 次墳丘の境界部分が入り組んでおらず、整然としていることから、まず、側部積石部を構築してから、その外側に 1 次墳丘を盛土したものと推定している。これに対し、キムドゥチョルとシムヒョンチョルは、前述したように、中央の墓壙部分を空けて、その外側に 1 次墳丘を盛った後に、木槨と側部積石部を設置したと推定している [キムドゥチョル 2009、シムヒョンチョル 2012・2013]。報告書に掲載されている図面 4（本稿の図 4）の墳丘断面図をみても、報告書の記述のとおり、側部積石と 1 次墳丘は接しているように見える。ただし、これを根拠にして側部積石部を構築した後に 1 次墳丘を盛ったとはいいきれない。そこで、側部積石部の高さに着目してみると、基底部から側部積石部上面までの高さは 4m を越えており、櫓状建造物があるとはいえ、これほど高い側部積石部を先に構築するのは困難といわざるを得ない。むしろ、側部積石部を構築しながら、1 次墳丘を盛土していくのが合理的といえる。事実、後述する北

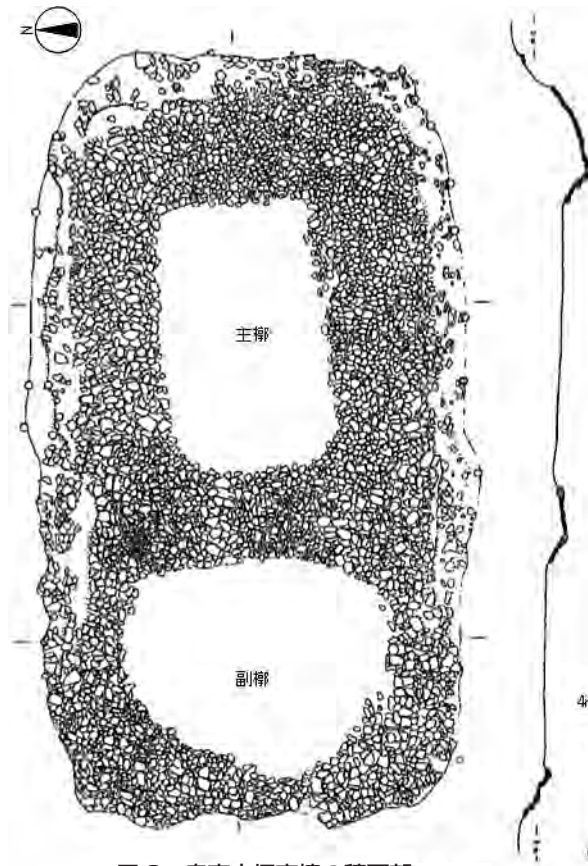


図8 皇南大塚南墳の積石部

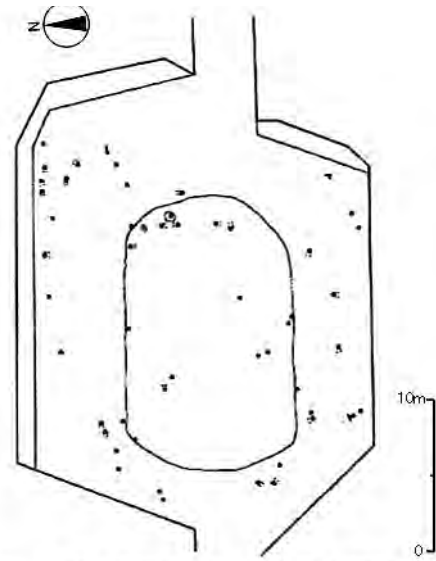


図9 皇南大塚南墳の1次墳丘上部柱穴群  
(休止面)

墳では、チョヨンヒョンが指摘するように、側部積石の構築と1次墳丘の盛土が同時に行われているのである〔チョヨンヒョン2002〕。

以上のように、外槨、中槨、内槨の構築は同時併行で行われた可能性が高く、側部積石部と1次墳丘も同時に構築されたと推定される。また、外槨の高さが3mを超えているため、周囲に足場を設けずに木槨全体を完成させることは困難である。このように考えるならば、築造工程の③～⑤はいずれも同時併行で行われたと考えるのが自然であろう。すなわち、木槨の下部を構築しながら、その周囲に槽状建造物を組み立てて側部に石を積み上げ、それと同時に外側に1次墳丘を盛土したものと考えられる。そうすれば、1次墳丘を作業面として資材を搬入し、徐々に木槨と側部積石部の上部を構築していけるであろう。一方、キムヨンソンは被葬者の生前に築造工程③～⑤が終了しており、一定期間が経過した後、埋葬が行われたとする寿陵説を主張している〔キムヨンソン2007〕。これについては、木槨部分が露出した状態での耐久性の問題もあり、空白期間をどの程度見積もるのが重要となる。この問題については後述する。

#### ⑥木槨の閉塞

木槨内への被葬者の埋葬と副葬品の埋納が終了した後に内槨と中槨が閉塞され、その後に外槨が閉塞された。報告書では木槨内部から鉄製蝶番軸金具が出土していることから、中槨と外槨の天井

部にはそれぞれ開口部が設けられていたと推定されている。しかし、鉄製蝶番軸金具については、木槨の設置後に木槨の蓋板を閉塞するための金具とみる見解もあり [イウンソク 1999]、木槨天井部の開口部の有無は不明である。以上、築造工程の①～⑥までは一連の工程と考えられ、これらを築造工程の第1段階とみなすことができる。

#### ⑦木槨上部積石部の構築

木槨を閉塞した後に、木槨上部に積石を行っている (図8)。木槨上部積石部は主槨側のみ構築されている。主槨の上部積石部 (東西約 13.2m, 南北約 11.5m) は東北隅と東南隅は側部積石部の隅とほぼ一致するが、東・南・北辺では側部積石部よりも約 50cm 外側に出ている。上部積石部は中心部分が高く、曲線を呈している。

#### ⑧1次墳丘の粘土密封

主槨側では上部積石部の上面を、副槨側では側部積石部の上面を粘土で密封している。粘土層の厚さは 1.4m になり、10 数層からなる。粘土層は積石部の外側にも広がり、南側では上部積石の外側 8m まで伸びており、1次封土の表面の一部をも覆っていた。

#### ⑨1次墳丘上部の木造建造物の構築

発掘調査時、墳丘を掘り下げていく過程で、積石部上面に達する前に、積石部上部の墳丘から垂直または傾斜する柱穴と、水平に伸びる木材痕跡が発見されている (図9)。柱穴は直径 5～30cm、深さ 50～100cm であった。木柱痕跡は積石部を中心として、東西約 24m、南北約 20m の長方形の範囲で確認された。これらの点からみて、積石部上部 (おそらく密封粘土層上面) に木造建造物 (高さ 1.4m 以上) が設置されていた可能性が高い。木柱が細いことからみて、木造建造物とはいっても、建物のようなものではなく、簡単な櫓あるいは木柱だけであった可能性もある。

以上、築造工程の⑦～⑨は埋葬行為が終了した後の主体部の密封作業であり、築造工程⑨では建造物が構築されていることからみて、密封粘土層上面を工程が区切れる古墳築造の休止面ととらえることができる。したがって、築造工程の⑦～⑨が第2段階と考えられる。

#### ⑩2次墳丘の構築

1次墳丘の上部に2次墳丘が構築される。報告書では、2次墳丘は外側を高く積み、黄褐色土と小礫層を挟みながら中心部方向に下るように盛土したものととらえている (図4・5)。しかし、前述したようにチョヨンヒョンの研究によれば、小礫層は区画石列であり、区画盛土方式によって水平式盛土方式で築造されたとされ、区画数は45区画であったと推定されている [チョヨンヒョ<sup>(14)</sup>ン 2002]。2次墳丘の表面は暗褐色粘土で被覆されている。報告書では2次墳丘が構築された後に、最終的に粘土で被覆されたものとされているが、チョヨンヒョンが指摘するように、後述する北墳の状況を考慮すれば、2次墳丘の盛土と粘土の被覆は同時併行で行われた可能性がある。2次墳丘の構築によって埋葬主体部は完全に密封され、古墳の築造が終了することから、築造工程⑩が第3段階であり、古墳築造の最終段階といえる。

## (2) 埋葬・儀礼行為

前述した皇南大塚南墳の築造工程をふまえて、出土遺物や赤色顔料塗布などの痕跡から築造過程で執り行われた埋葬と儀礼行為を復元してみる。埋葬・儀礼行為としては、以下の①～⑦を抽出できる。

### ①木槨構築にともなう儀礼

外槨内は小礫を敷いて床面としているが、これらの小礫に赤色顔料が塗布されていた。また、内槨の内面にも赤色顔料が塗布されていた。これらは木槨構築にともなう儀礼と関連する可能性がある。

### ②木槨内への被葬者の埋葬と副葬品の埋納

木槨のなかに木棺と副葬品が納められた。報告書やこれまでの研究では、いずれも主槨の木槨がすべて完成した後に、これらの行為が行われたと推定されている。しかし、前述したように外槨の高さは床面から3.5mにも達することから、外槨が完成したのちに上部から木棺や副葬品を搬入するのは不可能ではないが、困難な作業となる。そこであらためて木槨の構造をしてみると、外槨の内側に中槨が構築されており、外槨と中槨の間には小礫が詰め込まれていた(図6-1)。中槨の木材が残っていたわけではないので、中槨の高さは不明であるが、外槨と中槨の間の小礫は床面から1.8mの高さまで確認されており、これが中槨の高さを示すものと考えられる。もちろん、この値は正確なものではないが、おそらく床面から高さ2m前後であったものと推定される。また、中槨と内槨の間にも小礫が詰め込まれており、石壇状を呈していた。この石壇の高さは50cmであり、石壇上面から中槨上部までの高さは1.5m前後となる。この高さであれば、木棺や副葬品の搬入が容易であり、外槨と中槨の間も空間ではなく、小礫が詰め込まれているので、外側から無理なく搬入することが可能である。これらの点を考慮するならば、中槨の上端部の高さまで木槨部、側部積石部、1次墳丘を構築した段階で、被葬者の埋葬と副葬行為が行われた可能性が高いのではないかと考えられる。すなわち、中槨の上端部付近に埋葬・副葬行為のための古墳築造の中断面が存在する可能性を指摘しておきたい。これによって、外槨と中槨の間に小礫を詰め込んだ理由や、中槨と内槨の間に石壇を設けた理由もうまく説明できるのではないだろうか。

内槨の内部は仕切り板によって東西に分けられており、西側部分に被葬者を埋葬した木棺(長さ220cm、幅70cm)が納められていた(図10-2)。木棺の内面は赤色顔料が塗布されていた。木棺内の被葬者は60代男性と推定されており、東頭位で埋葬されていた。遺物は、頭部付近から金銅製出字形立飾冠(図11-1)、頭部の下部から頸飾(図11-5)、上半身部分から胸飾(図11-3)、腰部から金製鈿帯と腰佩(図11-2)、左足部から金銅装三累環頭大刀(図11-6)が出土した。これらはいずれも埋葬時に被葬者が装着あるいは携帯していた装身具類や武器類と推定されており、木棺内にはいわゆる副葬品は入れられていないことがわかる。副葬品の多くは、内槨東側の副葬品槨に納められていた(図12)。下層にはおもに各種容器類が配置され、上層には装身具類や環頭大刀などが置かれていた。副葬品槨から出土した遺物は、金銅・銀冠(図13-1・2)、銀製冠帽(図13-3)、白樺樹皮製冠帽、金・銀製鳥翼形冠飾(図13-4)、耳飾、金・銀製指輪、金銅・銀製鈿帯、金銅製飾履(図



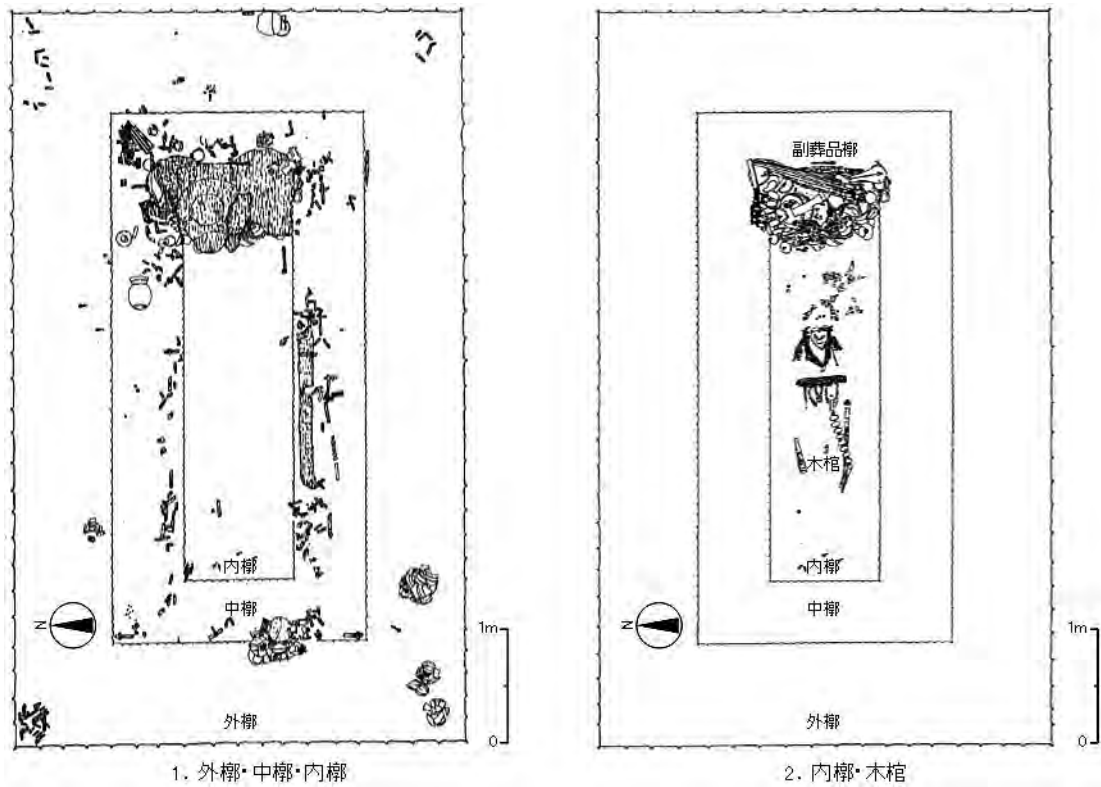


図 10 皇南大塚南墳主槨の遺物出土状況

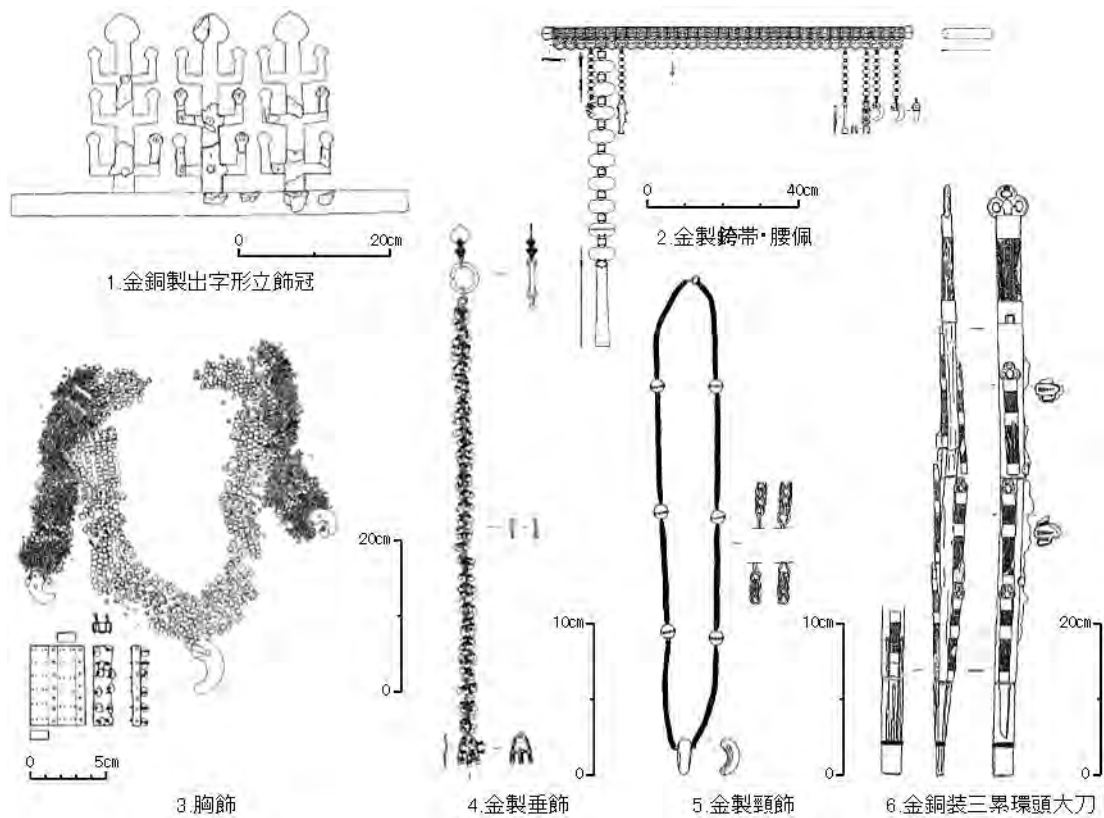


図 11 皇南大塚南墳木棺の出土遺物

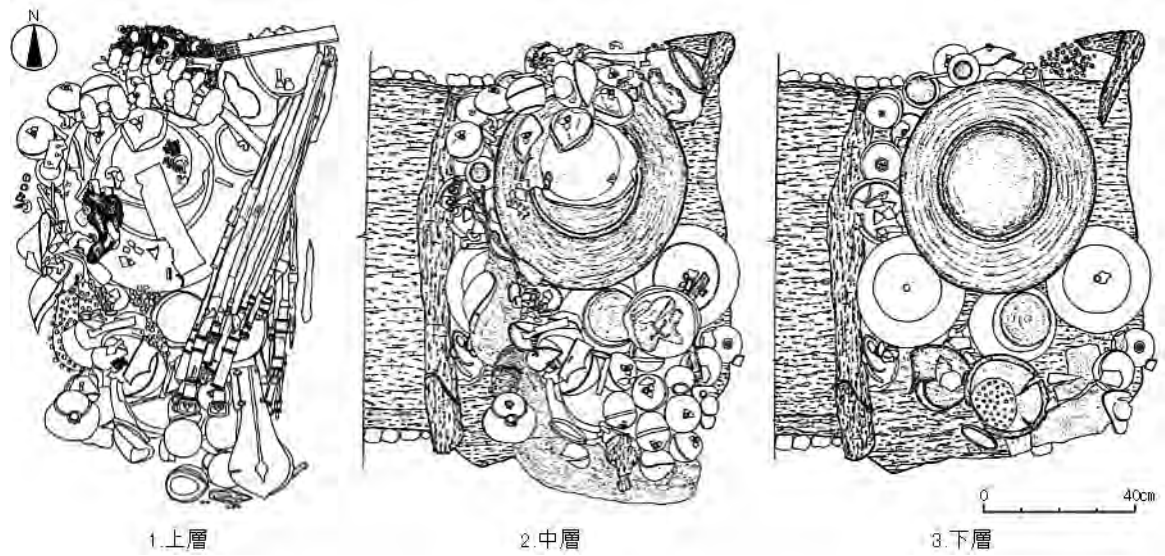


図12 皇南大塚南墳主柩副葬品柩の遺物出土状況

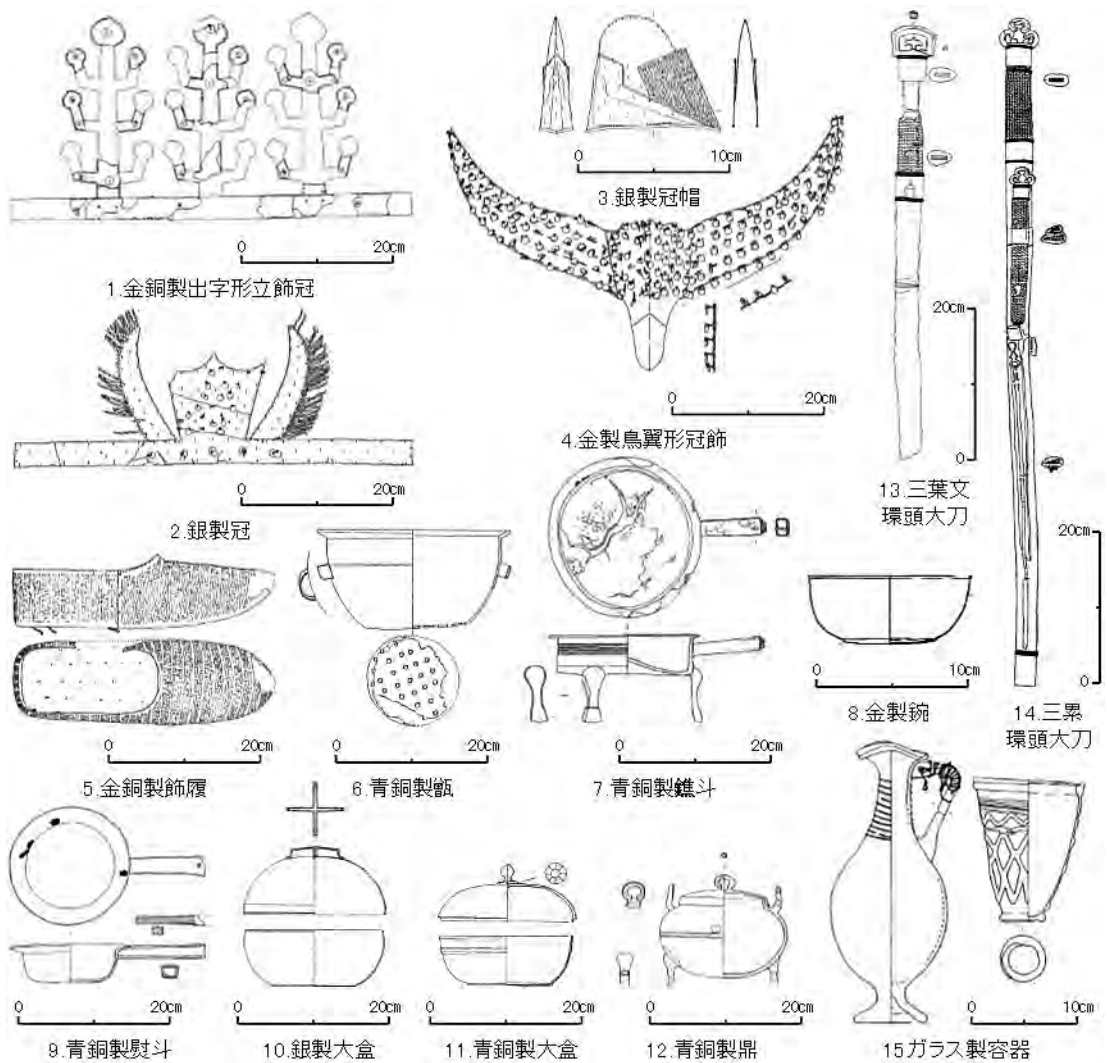


図13 皇南大塚南墳主柩副葬品柩の出土遺物



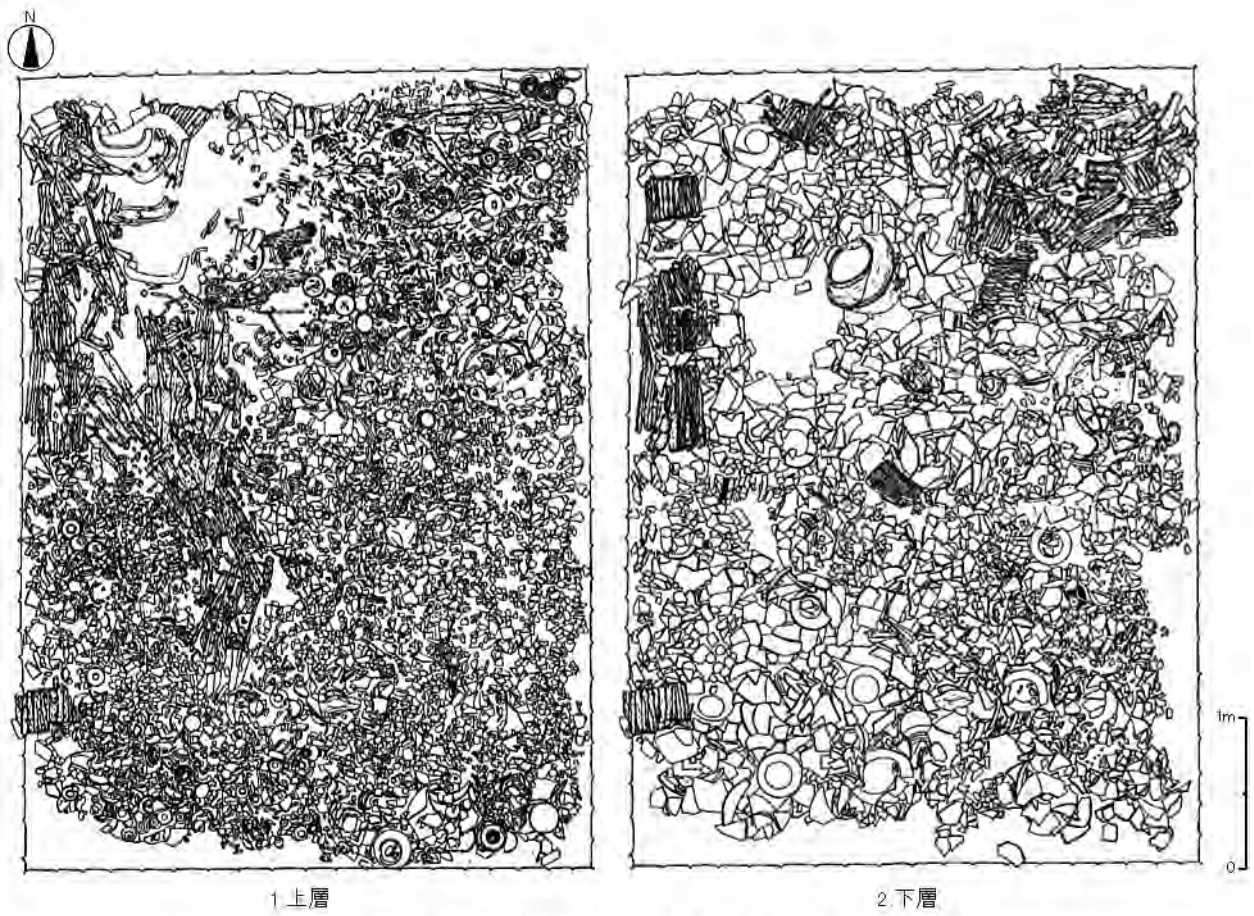


図 14 皇南大塚南墳副槨の遺物出土状況

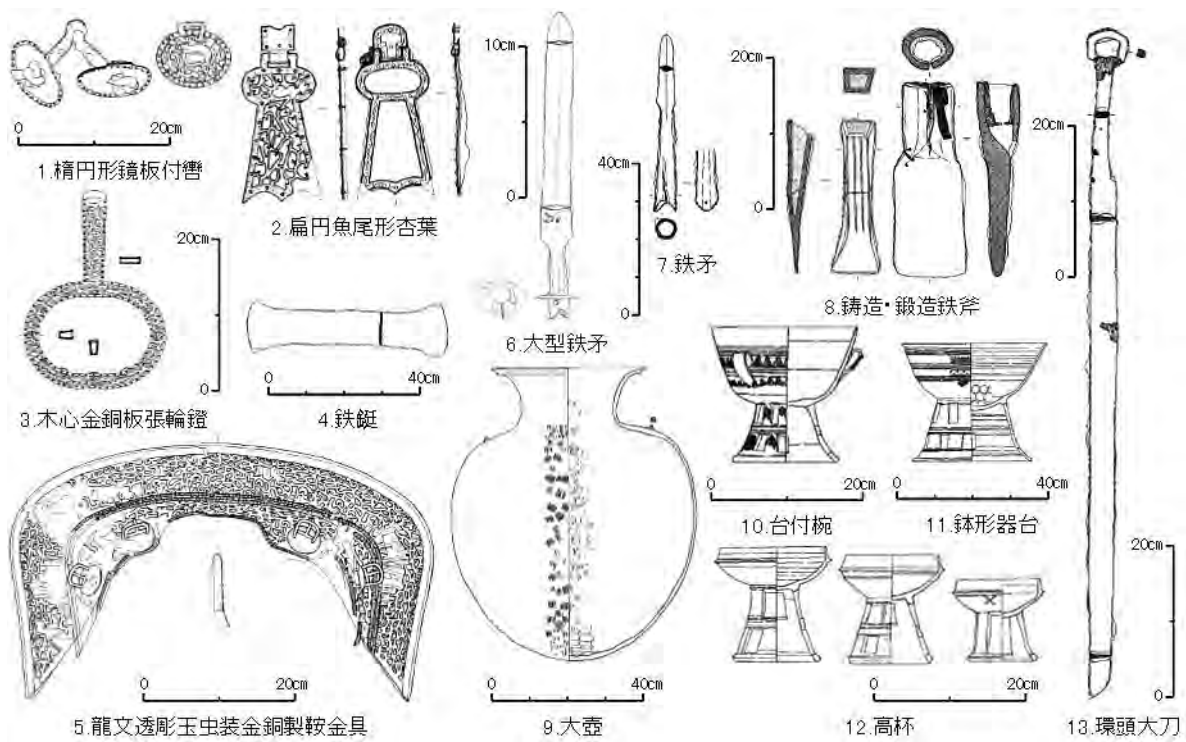


図 15 皇南大塚南墳副槨の出土遺物

13-5), 玉類などの装身具類, 金銅・銀製脛甲, 環頭大刀(図13-13・14)・小刀などの武器・武具類, 金・金銅・銀・青銅・ガラス製容器類(図13-6~12・15), 漆器類, 土器類などであった。副葬品槨はおもに威信財と容器類を副葬する場であったと考えられる。また, 内槨と木棺東壁間には柳葉形の雲母が副葬されており, 内槨上部には玉虫装鈿帯, 金製瓔珞, 銀製鳥翼形冠飾, 金銅製脛甲が置かれていた。さらに, 中槨と内槨間の南側石壇上面部分に15歳前後の女性が副葬品とともに埋葬されていた<sup>(15)</sup>(図10-1)。積石木槨墓の場合, 追葬は困難であるので, 殉葬者と推定される。内槨周囲の石壇は殉葬の場でもあったことを示している。

副槨には武器類, 農工具類, 馬具類, 容器類など数千点にのぼる副葬品が納められていた(図14)。まず, 副槨の床面全面に大型丸底壺(図15-9)が列をなして配置され, その間に鉄器が置かれ, これらの上に各種遺物が積まれていた。とくに, 副槨の北西隅には馬具類が副葬され, それ以外の部分に大型・小型の土器類が配置され, その上に鉄器が積まれていた。副槨の副葬品で多いものは武器類と容器類であり, とくに武器類では鉄矛(図15-6・7), 容器類では高杯(図15-12)などの土器類の副葬が顕著である。主槨の副葬品の種類と比較すると明らかな違いが認められ, 副槨はおもに大量の鉄器と土器を埋納する空間であったことがわかる。

### ③木槨上部への副葬

主槨内への埋葬と副葬品の埋納が完了した後に, 主槨上部への副葬行為が行われている。中槨と内槨の間の石壇上面部分から出土した遺物の多くや, 木槨内に陥没した河原石の中から出土した多数の遺物(土器類, 装身具類, 鉄器類, 馬具類)は, もともと木槨上部に置かれていたものが落下したものと推定されている(図16)。報告書ではこれらの遺物は外槨上部に置かれていたものと推定されているが, 中槨と内槨の間の石壇上面部分から多くの遺物が出土していることからみて, 中槨上部に置かれていた可能性もあるだろう(図10-1)。中槨上部と外槨天井部との間は空間となっているのに対し, 外槨上部と上部積石部との間には空間がないことからみても, その可能性は高い。また, 中槨上部への副葬行為は, 前述した埋葬・副葬行為のための中槨の上端部付近における古墳築造の中断面の存在とも関連するものと考えられる。報告書においては, 木槨上部への副葬行為は, 上部積石部を構築する前に行われた儀礼と関連すると解釈されている。これに対し, 木槨上部の遺物群を殉葬者の痕跡とする見解もある。イウンソクやキムヨンソンは, 出土した金製耳飾のセット数などから, 4~5人が殉葬されていたものと推定している<sup>(16)</sup>[イウンソク1999, キムヨンソン2007]。副葬行為, 殉葬行為のいずれであったとしても, 中槨上部が重要な儀礼の場であったことは間違いない。なお, 副槨上部には大型鉄矛1点が置かれていた。

### ④上部積石部における儀礼

主槨の上部積石部では赤色顔料を散布・塗布した痕跡が確認されている。また, 上部積石部の上面(密封粘土層の下部)から藁のような植物腐食物が出土し, 副槨陥没部の周辺の積石部内から多量の土器片が出土した。これらはいずれも粘土密封に先立って木槨上部の積石部で行われた儀礼の痕跡と推定される。





図 16 皇南大塚南墳主槨上部の副葬土器

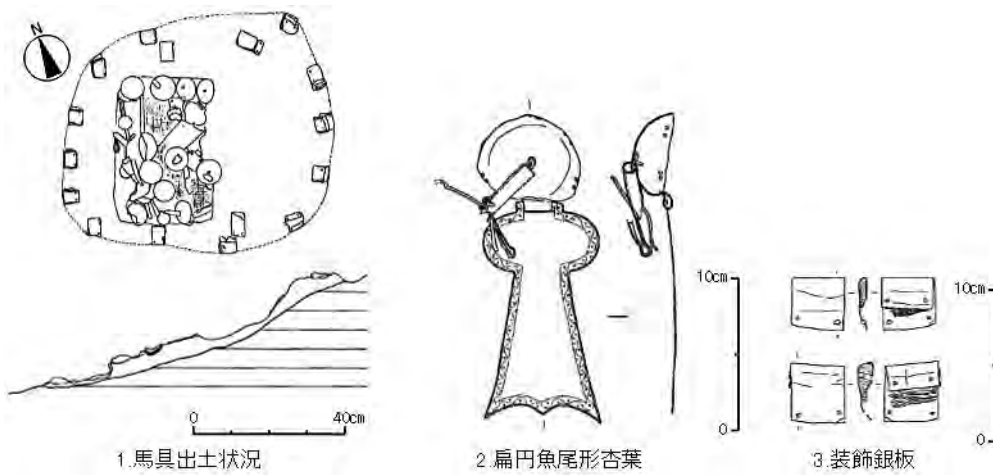


図 17 皇南大塚南墳 2 次墳丘頂上部の馬具埋納遺構

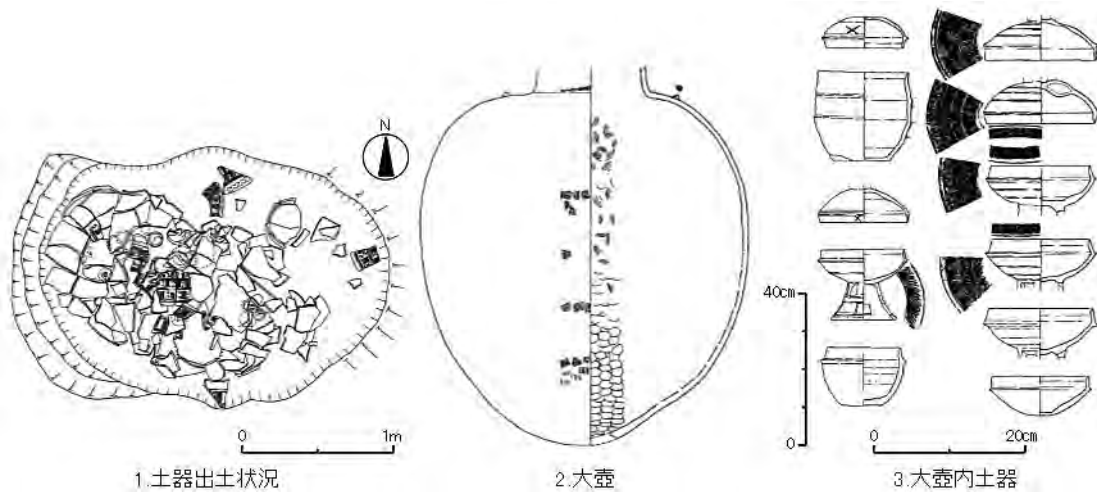


図 18 皇南大塚南墳 2 次墳丘頂上部の土器埋納遺構

### ⑤ 1次墳丘の粘土密封にともなう儀礼

上部積石部および1次墳丘を覆う密封粘土層内から木炭と多数の土器類が出土した。また、主槨陥没部と副槨陥没部の間からも多くの土器が出土した。これらの遺物は、上部積石部および1次墳丘を粘土で密封する過程で行われた儀礼の痕跡であると考えられる。

### ⑥ 1次墳丘上部の木造建造物における儀礼

前述したように、密封粘土層上面に木造建造物が設置されており、この面が古墳築造の休止面であることからみて、ここで何らかの儀礼が行われたであろうことは想像に難くない(図9)。事実、木造建造物の柱穴付近から鉢形器台も出土している。

### ⑦ 2次墳丘構築にともなう儀礼

1次墳丘上部に構築された2次墳丘上からも遺物が出土している。まず、墳丘頂上部付近(深さ約2m)に馬具類が布で包まれて箱に納められた状態で埋納されていた(図17-1)。埋納されていた馬具は金銅製雲珠13点と金銅製扁円魚尾形杏葉23点(図17-2)であった。また、墳丘頂上部から北北東側に19mの地点の表面近くに大壺4個が並べて埋納されていた。鉢形器台の鉢部を蓋として、大壺の中には動物骨と貝殻が入った軟質小壺が入れられていた。墳丘中心部から東側に16mの地点の表面近くに大壺1個と鉢形器台1個が埋納されていた。鉢形器台は大壺の蓋として使用されており、大壺の中には高杯12個、把手付杯1個、赤色軟質小盒10個などの小型土器が入れられていた(図18)。高杯の脚部と蓋のつまみは意図的に打ち欠かれていた。小型土器の中には動物骨(哺乳類、魚類、鳥類)と貝殻が入れられていた。墳丘の中心点から北北西側に26mの地点の表面近くには土管形土製品4個が埋納されていた。

これら2次墳丘上に埋納された遺物は、その状態などからみて、古墳構築の最終段階における儀礼の痕跡と推定される。とくに、墳丘頂上部における馬具の埋納は、皇南大塚北墳や天馬塚でも確認されており、大型積石木槨墓に共通してみられる儀礼として注目される。また、大壺の中に入れていた高杯のうち、脚部が残存していたもの(報告書の図面200-⑥・本稿の図18-3)をみると、副槨に副葬されていたもの(図15-12)より、脚部が曲線的で短く、時期的に若干下る可能性がある。これは木槨への副葬品埋納時期と2次墳丘構築時期との時間差を示しており、前述した築造工程⑨と⑩の間における古墳築造の休止期間と関連する可能性が高い。土器の型式差の時間幅をどのくらい見積もるかは難しい問題ではあるが、少なくとも1~2年というような短時間ではなさそうである。

## 2 皇南大塚北墳

### (1) 築造工程

南墳に引き続いて北墳が構築されたが、南墳の墳丘の一部を除去して北墳が構築されている(図3・19)。報告書の発掘調査データを検討した結果、以下のとおり、築造工程は①~⑧の順に進行したと考えられるが、南墳の場合と同様に、これらの中には一部併行して行われた工程もある。

### ①古墳築造場所の整地

古墳の築造範囲となる地表面の整地作業を行う。この時、先に造られた南墳の墳丘北側の一部を除去している。

### ②木槨の構築

北墳の木槨は主槨のみの単槨式であり、木槨は外槨と内槨の二重槨を呈する<sup>(17)</sup>(図 20)。地表面に木槨を設置する範囲よりもやや広く小礫を厚さ 35cm に敷いて木槨の基底部分を構築している。この小礫層の上に、外槨の壁面ラインに合わせて、大きめの河原石を幅 50cm、高さ 30cm に積んで石壇を構築して、その上に外槨(東西 6.8m、南北 4.6m、高さ 3.7m)をのせている。外槨の平面形は、南北長壁の内側に東西短壁が入り込む形態であり、直径約 20cm の丸太を使用し、上下を平らにして、重ね合わせたものと推定されている。外槨の中には厚さ約 4cm の木板を敷き、その上に内槨(東西 3.3m、南北幅 80cm、高さ 80cm)を設置している。内槨は底板をもっている。内槨の東側を除く三面に小礫を積み上げて石壇(幅 80cm、高さ 55cm)を構築して内槨を保護している。石壇の状況からみて、石壇の外側に南墳のような中槨が存在した可能性もある。内槨東側の石壇が造られていない空間に凸字形に板材を敷いている。内槨の内部は、南墳と同様に東側の副葬品槨(長さ 80cm)と西側の木棺槨(長さ 2.5m)に仕切板で分けられている。報告書では内槨→内槨周囲の石壇→外槨の順に構築されたものと推定している。仮に石壇の外側に中槨があったとすれば、中槨→内槨→内槨周囲の石壇→外槨の順に構築されたことになるが、南墳と同様に、外槨・中槨・内槨の構築がある程度併行して行われた可能性がある。

### ③木槨側部積石部の構築

南墳と同様に、木槨側部の積石作業を行う前に、木槨の外側に櫓状建造物を構築している(図 21)。櫓状建造物は直径約 30cm の木柱を 2 列にめぐらし構築されている(内側木柱列:長さ約 10m、幅 7.7m、外側木柱列:長さ 13.6m、幅 11.3m)。木柱は南北両長辺に 44 本、東西両短壁に 20 本、合計 64 本から構成され、地下 50cm まで打ち込まれ、木柱の間には横木が架け渡されている。さらに、周囲には 30~40 度に傾斜した支木が設置され、櫓状建造物を構築している。ただし、南墳に接する部分は南墳の基底部分を削平し、底部に 2 列の木柱を立てている。この櫓状建造物に合わせて積石作業を行っているが、木槨の高さより約 1.7m 高く積石壁を構築し、木槨より高い部分については、積石壁の内側に厚さ約 5cm に粘土をはっている。チョヨンヒョンが指摘するように、木槨床面から高さ 3m までの側部積石は外側が傾斜しているのに対し、それより上部の積石は外側が垂直に積み上げられており、積み方が異なっている[チョヨンヒョン 2002](図 19)。後述するように、この境界部分が埋葬・副葬行為のための古墳築造の中断面となる可能性がある。

### ④1 次墳丘の構築

1 次墳丘の構築については、報告書では明確に記されていない。これは北墳の報告書が刊行された 1985 年の段階ではまだ墳丘構築における 1 次墳丘と 2 次墳丘の区別が明確でなかった点に起因する。ただし、報告書では地上 11m 地点を境にして、その上下で墳丘の盛土方法に変化がみら

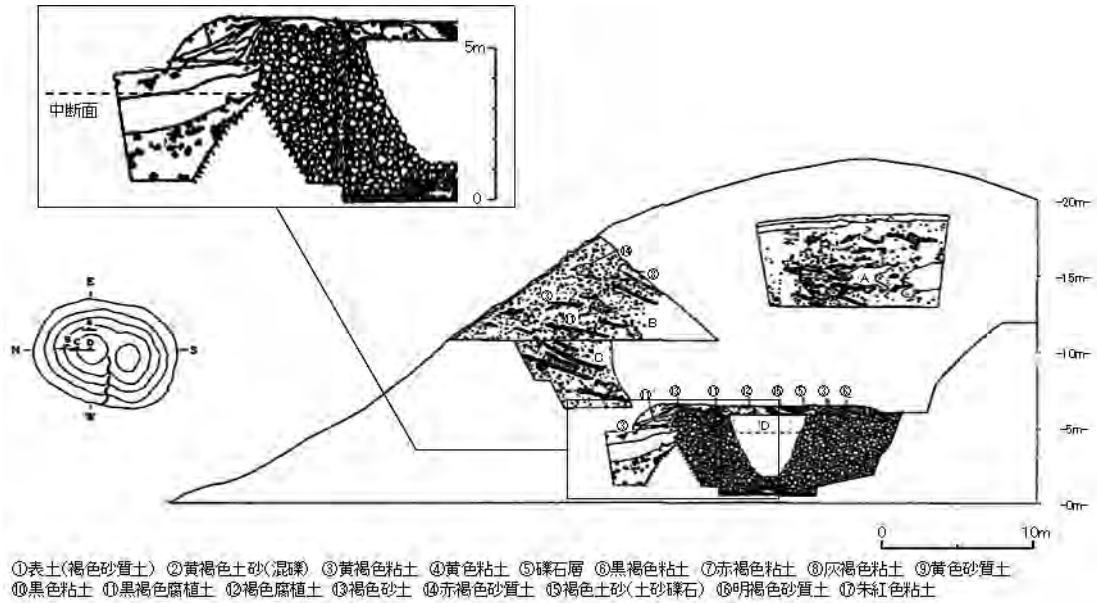


図19 皇南大塚北墳の墳丘断面図(南-北)

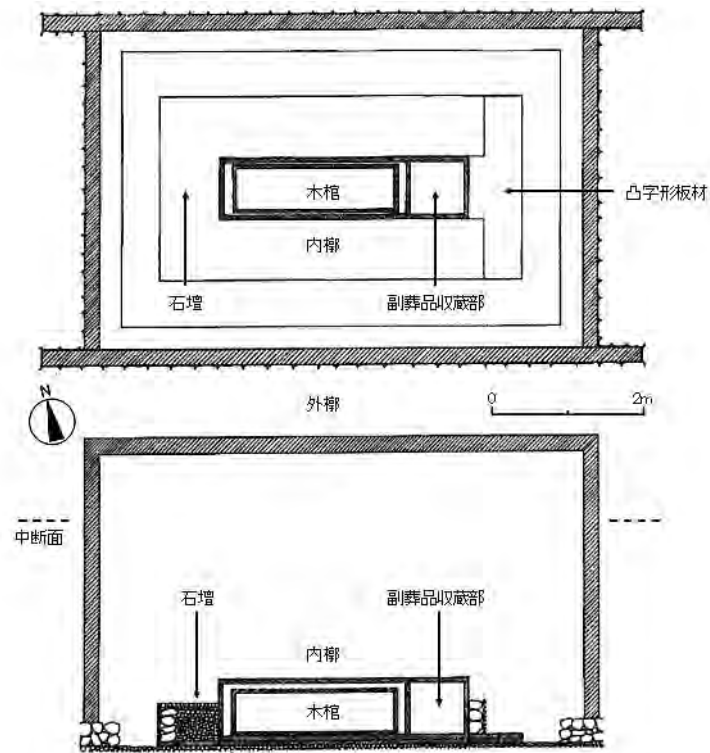


図20 皇南大塚北墳の木槨



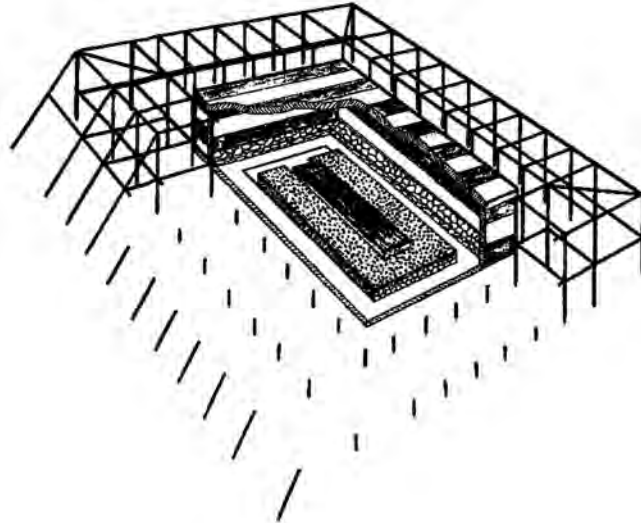


図 21 皇南大塚北墳の木槨側部積石部檜状建造物

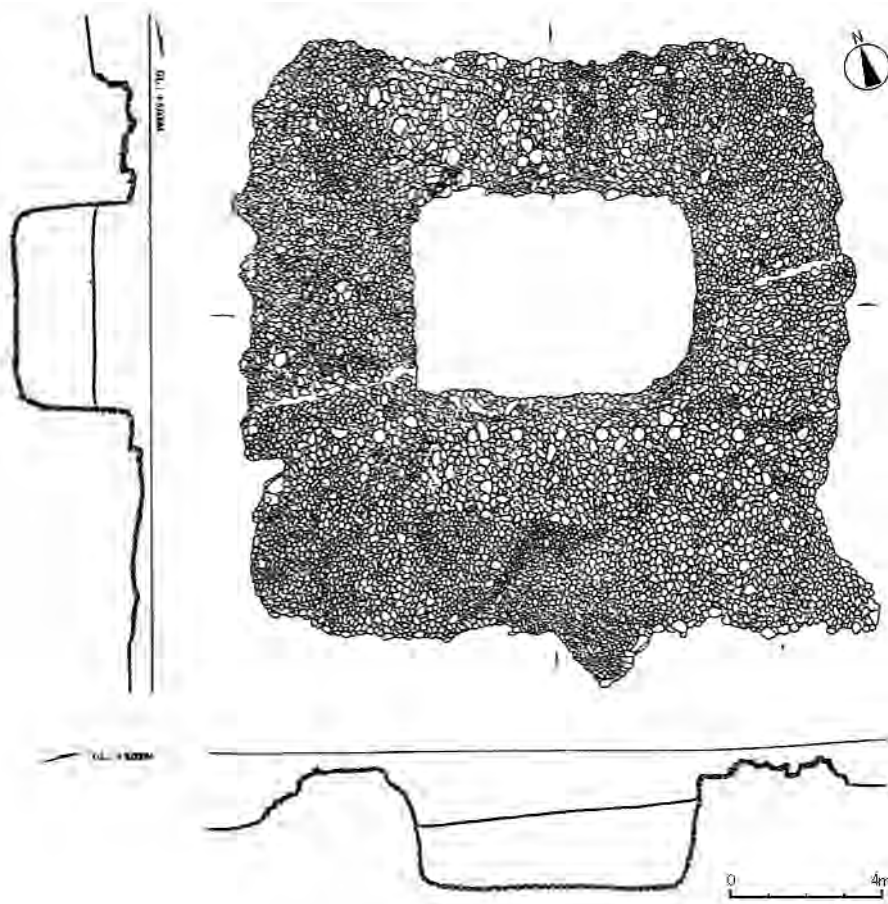


図 22 皇南大塚北墳の積石部

れるとされているので、これが1次墳丘と2次墳丘の境界と推定される。したがって、北墳も南墳と同様に木槨の高さまでの1次墳丘がまず構築され、上部積石部を構築し粘土で密封した後に2次墳丘が構築されたものと考えられる。前述したように、木槨床面から高さ3mまでの側部積石部は傾斜をなして積まれているが、それより上部の側部積石部はほぼ垂直に積み上げられており、積石と1次墳丘の盛土が同時併行で行われたことを示している(図19)。したがって、南墳と同様に築造工程の②～④は併行して行われた可能性が高い。墳丘の周囲には一辺4.5m、高さ2mの断面三角形に河原石を積み上げて護石を構築している。また、墳丘の外縁に杭を打ち込んで、外郭線を決めてから、墳丘を構築している痕跡が確認されている。

#### ⑤木槨の閉塞

木槨内への被葬者の埋葬と副葬品の埋納が終了した後に、内槨および外槨の天井を閉塞した。報告書では環形金具が付いた円柱形鉄棒が出土していることから、外槨上部に開閉施設があったとするが、南墳と同様に詳細は不明である。これら築造工程の①～⑤は、南墳の場合と同様に一連の工程と考えられ、第1段階となる。

#### ⑥木槨上部積石部の構築

木槨を閉塞した後に、木槨上部に河原石を積み上げる。前述したように、側部積石部は木槨上部より約1.7m高く構築されており、その高さまで上部積石が積み上げられたものと推定される(図22)。

#### ⑦1次墳丘の粘土密封

上部積石部の上に礫を平らに敷き、その上を5～7cmの粘土層で覆っている。さらに、粘土層上面を再び黒褐色の粘土で固めている。前述した南墳では、この面で木造建造物が確認されているが、北墳ではみられない。ただし、後述するようにこの面で儀礼が行われているので、古墳築造の休止面ととらえておきたい。築造工程の⑥～⑦は埋葬行為が終了した後の密封作業であり、第2段階となる。

#### ⑧2次墳丘の構築

1次墳丘の上に2次墳丘を構築したものと推定されるが、前述したように報告書では1次墳丘と2次墳丘の区別はされていない。ただし、2次墳丘とみられる地上から11m以上の部分は、墳丘の周縁部から中央へ向かって下るように盛土されたと記されている(図19)。これに対し、チョヨンヒョンは南墳のように北墳も放射状に区画されて水平式盛土方式によって盛土されたと推定している[チョヨンヒョン2002]。区画数は32区画であり、南墳より13区画少ない。また、積石部で確認された南部と北部に区分する線は、盛土区画の主要基準であった可能性が高いと指摘する(図22)。さらに最終的に2次墳丘の表面が被覆土によって覆われるが、墳丘盛土と被覆土の境界がジグザグ状に不規則であり、墳丘の盛土と被覆が同時併行で行われたものとみている。南墳と同様に築造工程⑧が最終段階であり、第3段階となる。

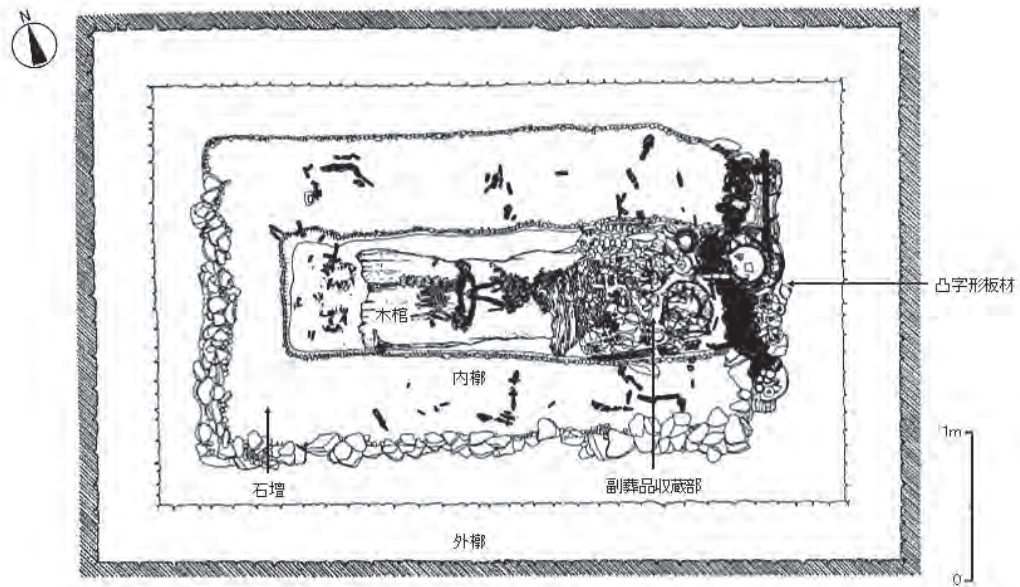


図 23 皇南大塚北墳木槨の遺物出土状況

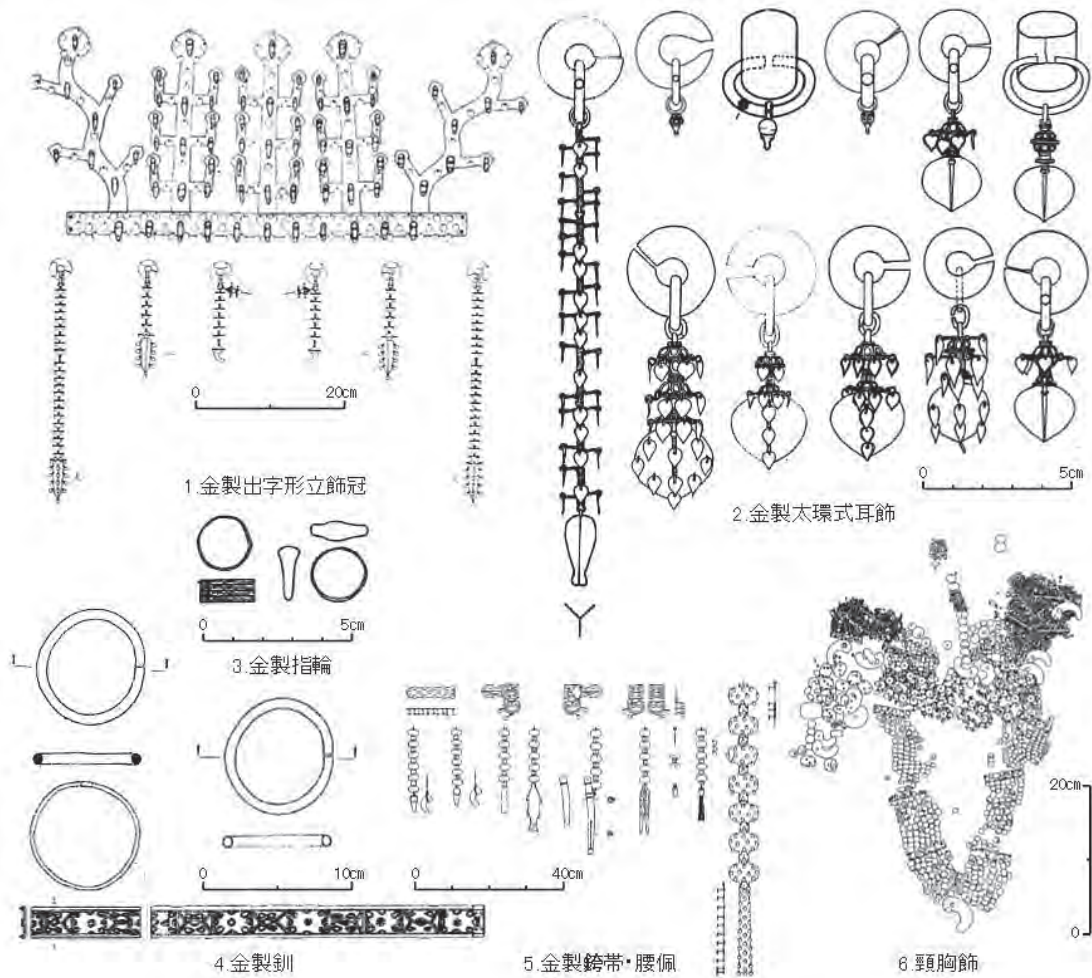


図 24 皇南大塚北墳木槨の出土遺物



## (2) 埋葬・儀礼行為

前述した皇南大塚北墳の築造工程をもとに、出土遺物などから埋葬と儀礼行為を復元してみる。埋葬・儀礼行為としては以下の①～⑥を抽出できる。

### ①木槨構築にともなう儀礼

地表面に小礫を厚さ35cmに敷いて木槨の基底部を構築した後に、赤色顔料がまかされている。これは南墳と同様に木槨構築にともなう儀礼の痕跡と考えられる。

### ②木槨内への被葬者の埋葬と副葬品の埋納

北墳の外槨も南墳と同様に高さが3mを越えることから、外槨を上部まで完成させた後に、上から木棺や副葬品を搬入することは困難となる。したがって、外槨構築の途中で埋葬・副葬行為のための古墳築造の中断面が存在するのではないかと考えられる。そこで注目されるのが築造工程③の木槨側部積石部における傾斜変換点である(図19)。前述したように木槨床面から高さ3m地点を境にして、その上下で側部積石外側の傾斜が変化している。内槨の周囲には高さ55cmの石壇が構築されているので、石壇上面までは約2.5mとなり、埋葬が容易となる。すなわち、木槨床面から3mの高さまで外槨、側部積石部、1次墳丘を構築した段階で築造を一時中断し、埋葬・副葬行為が行われたのではないかと考えられる(図20)。

内槨内部は仕切り板によって西側の木棺槨と東側の副葬品槨に分けられている(図20)。西側の木棺槨に納められた木棺(長さ220cm,幅70cm)は組合せ式で、上面が金箔で装飾されていた。木棺内には被葬者が東頭位で埋葬されており、おもに被葬者が直接身に着けていた装身具類が出土した(図23)。頭部付近から金製出字形立飾冠(図24-1)と金製垂飾付太環式耳飾(図24-2)、胸部付近から頸胸飾(図24-6)、腰部付近から金製鍔帯、金・銀製腰佩(図24-5)、金製耳飾、右手と左手付近から金製指輪(図24-3)などが出土した。木棺内の被葬者については、報告書では被葬者が装着していた耳飾がいずれも太環式であったことや、棺内に大刀が副葬されていないことなどから女性であると推定されている。また、副葬品槨出土の銀製鍔帯に「夫人帯」銘があることから、王妃あるいは王族の夫人であり、南墳の被葬者の夫人である可能性が高いとする。副葬品槨には床面に大型金属容器と土器類が置かれ、その上に小型金属容器、ガラス容器をのせた後、最上段に装身具と環頭大刀を配置している。副葬品槨に納められていたものは、銀製冠飾(図25-1)、白樺樹皮製冠帽、金製垂飾(図25-2)、玉類、銀・金銅製鍔帯、銀・金銅製腰佩(図25-3)、金銅製飾履(図25-6)などの装身具類、金銅装三葉文環頭大刀(図25-16)などの武器類、金・銀・金銅・青銅・鉄製容器(図25-7～13)、ガラス容器(図25-4)、土器(図25-14・15)などであり、威信財と容器類が中心である。

石壇および内槨の東側には凸字形の板材が敷かれており、その上に多くの副葬品が置かれていた。ここに配置されていた副葬品は、大型鉄釜、漆器、土器(図26-5～8)、鉄鋌(図26-2)、鉄斧(図26-1)、脚付方柱形鉄棒、鉄鏡(図26-4)、金製環珞、水晶原石などであり、容器類と鉄器類が主体を占めている。副葬品の内容からみて、南墳の副槨に納められていた副葬品の内容と共通する。また、南・西・北側石壇の上面からも遺物が出土しているが、原位置を保っていないものが多く、も



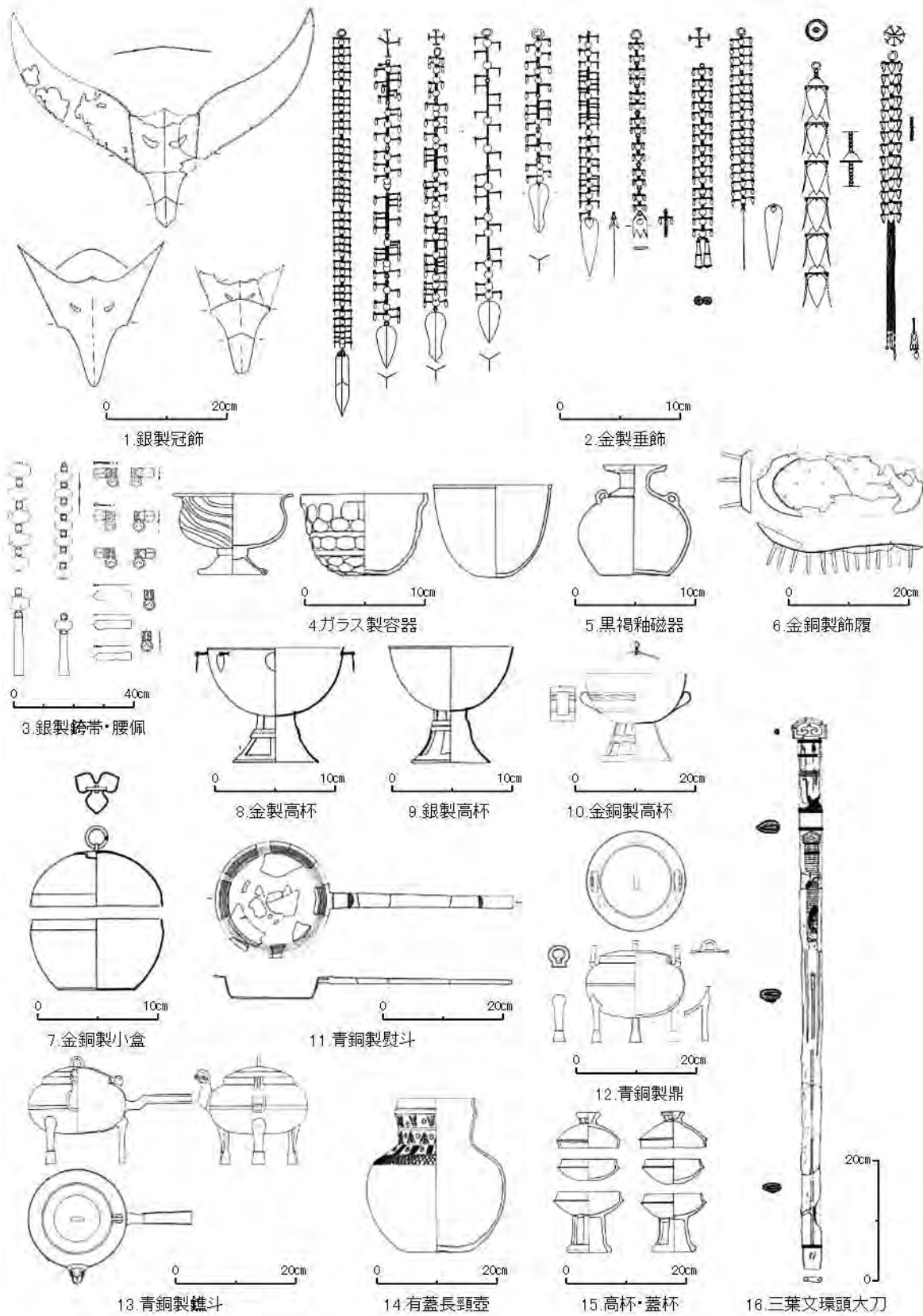


図 25 皇南大塚北墳副葬品槨の出土遺物

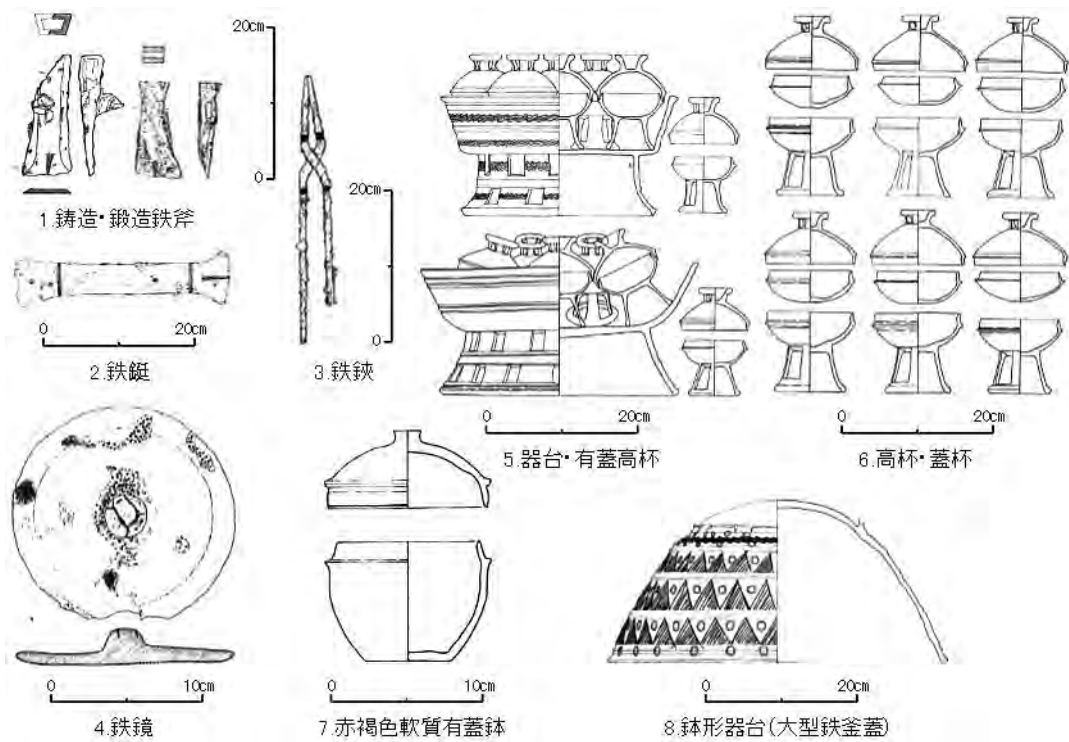


図26 皇南大塚北墳石壇東側(凸字形板材上)の出土遺物

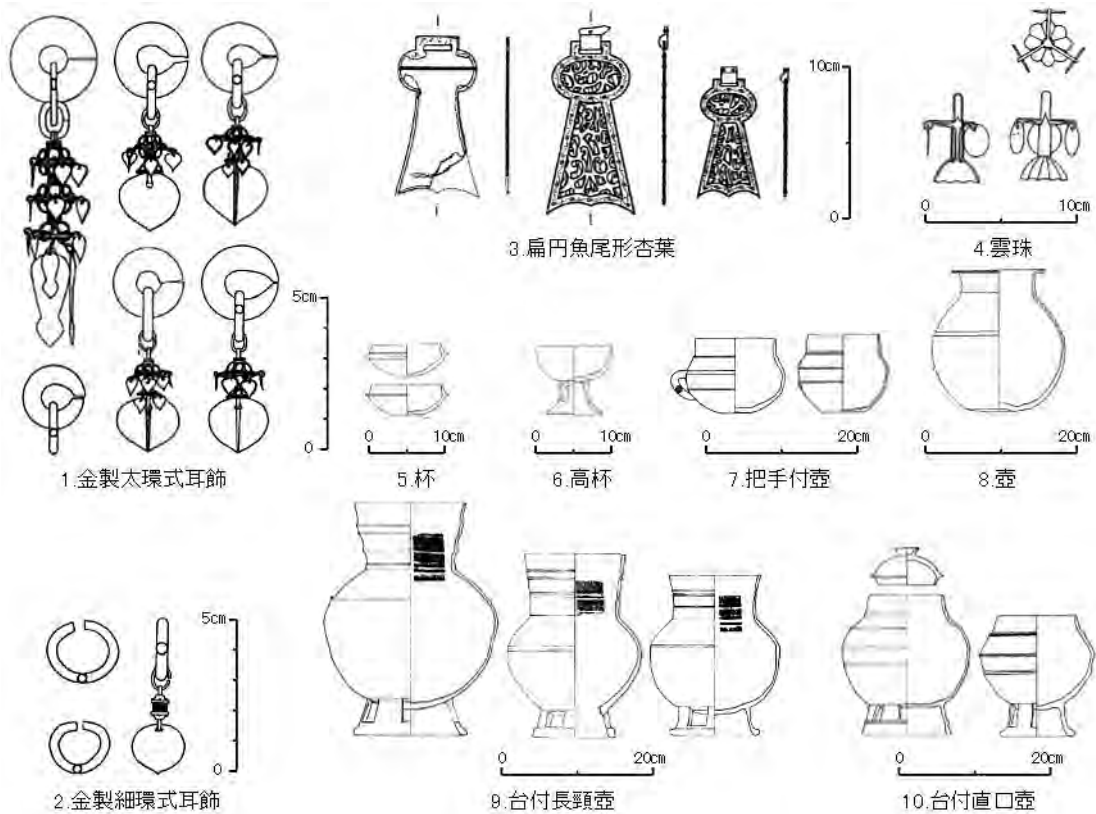


図27 皇南大塚北墳木槨上部の副葬遺物

とも石壇上面には副葬品がほとんど置かれていなかったとみられる<sup>(18)</sup>。

### ③木槨上部への副葬

木槨陥没部から河原石とともに、装身具類(図27-1・2)、馬具類(図27-3・4)、土器類(図27-5~10)など多くの遺物が出土したが、これらはもともと木槨上部に置かれていたものが落下したものと推定されている。仮に外槨の中に中槨があったとすれば、南墳の場合と同様に中槨上部に副葬されていた可能性もある。なお、装身具については殉葬者にともなうものと考え、6~8人が殉葬されていたとする見解も提示されている[イウンソク1999, キムヨンソン2007]。

### ④上部積石部における儀礼

上部積石部の上面から遺物は出土しなかった。ただし、積石内部から雲母3枚が出土している。また、上部積石部の上面から約1m下の陥没部西側で赤褐色土器が出土し、約2m下の陥没部中央から紡錘車形石器4が出土した。これらは上部積石部の構築にともなう儀礼と関連する遺物であると考えられる。

### ⑤1次墳丘の粘土密封にともなう儀礼

積石部上面を覆う粘土層には全面に木炭片がまかれていた。南墳でも同様に密封粘土層内から木炭が出土しており、上部積石部および1次墳丘を粘土で密封する過程で行われた儀礼と関連するものと推定される。

### ⑥2次墳丘構築にともなう儀礼

南墳と同様に2次墳丘の頂上部付近から埋納遺物が出土している。墳丘頂上部基準点から北側約2mの地点において、表面から約60cm下の粘土層中に馬具類が麻布に包まれた状態で埋納されていた。埋納されていた馬具類は扁円魚尾形杏葉5個(図28-1)、金銅製雲珠105個(図28-2)、金銅製飾板などであった。馬具類の周囲には、鉄斧2個(図28-5)、鉄刀子2個(図28-6)、高杯2個(図28-3)、赤褐色軟質把手付椀1個(図28-4)が置かれていた。また、墳丘頂上部基準点から東側約16mの地点から大型硬質土器片(壺, 器台)が多数出土した。

これらは南墳と同様に2次墳丘構築、すなわち古墳築造の最終段階における儀礼と関連するものと考えられる。雲珠や扁円魚尾形杏葉などの金銅製馬具類を埋納する点や、大型土器類を用いた儀礼をおこなっている点も南墳と共通しており、大型積石木槨墓において定型化した儀礼であったことがうかがえる。また、墳丘頂上部に埋納されていた扁円魚尾形杏葉(図28-1)は大型品で、下端部両側の突出が顕著となっており、木槨上部に副葬されていたもの(図27-3)より時期的に下ると考えられる。また、墳丘頂上部から出土した高杯(図28-3)も木槨内に副葬されていたもの(図25-15, 26-6)よりも新しい可能性がある。これは南墳の場合と同様に築造工程の⑦と⑧との間、すなわち1次墳丘密封後から2次墳丘構築までの間に古墳築造の休止期間が存在する可能性が高いことを示している。



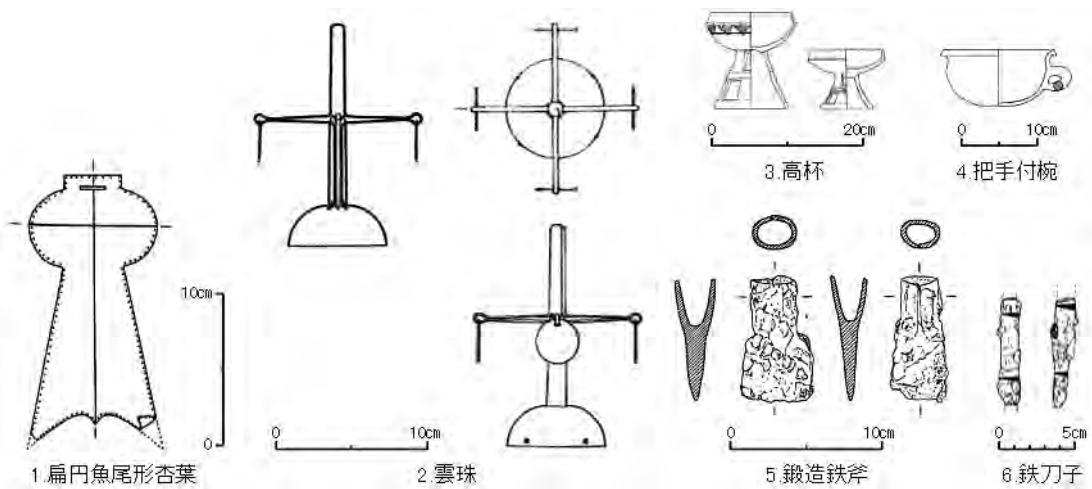


図28 皇南大塚北墳2次墳丘頂上部の埋納遺物

### ③……………大型積石木槨墓における埋葬プロセスの総合的復元と考察

以上、皇南大塚南墳と北墳の発掘調査データから推定される築造工程と埋葬・儀礼行為について検討した。ここでは両古墳の築造工程と埋葬・儀礼行為から抽出できる埋葬プロセスの総合的な復元を試みるとともに、そこから派生するいくつかの問題について考察してみる。

埋葬プロセスの総合的な復元を行うに当たって、まず寿陵の問題について検討しておく必要がある。研究史でも述べたように、キムヨンソンは木槨、側部積石部、1次墳丘などが完成し、一定期間経過した後に埋葬が行われたととらえ、積石木槨墓の下部構造部分の構築が被葬者の生前に完了していたと考えている[キムヨンソン2007]。いわゆる寿陵説である。日本列島の大型古墳に寿陵(生前墓)が存在することは、すでに多く指摘されている[茂木1994]。被葬者の生前に古墳が完成されなくても、生前から築造が始まっている古墳は少なくないであろう[青木2009, 日高2012]。皇南大塚南墳や北墳の場合も大型墳であり、前述したように完成まで多くの段階を経て構築されているので、被葬者の生前から築造が始まっていたとしても不思議ではない。皇南大塚は皇南洞古墳群という慶州の中心古墳群に位置しており、被葬者の生前にすでに古墳の選地が行われていた可能性は高い。また、古墳基底部の構築なども生前に行われていた可能性がある。ただし、キムヨンソンが主張するように木槨、側部積石部、1次墳丘が生前に完成していたとすると、木槨が露出したまま長期間維持されたことになる。高さ3.5mの巨大な木槨と側部積石部を露出させたまま何年も維持することは極めて困難であると考えられる。そもそも寿陵は、皇南大塚のような墳丘後行型の墳墓ではなく、墳丘が先に造られ、墳丘の完成後に墳丘を掘削して埋葬主体部を構築する墳丘先行型の墳墓においてはじめて可能になるとされる[和田1989・2014]。

報告書の試算によれば、北墳の場合、墳丘の土量は27,549m<sup>3</sup>、積石量は1,123m<sup>3</sup>、木槨の体積



は125m<sup>3</sup>、外周の護石量は805m<sup>3</sup>、南墳の切取量は10,639m<sup>3</sup>であり、古墳全体の体積は29,828m<sup>3</sup>であるという。古墳築造に要した延人数は約37,000名と推定されており、1日に約200名が作業に参加したとすれば、築造期間は185日となると試算されている。この試算を検証する材料をもってはいないが、ひとつの参考にはなるであろう。また、上位階層ではモガリの儀礼が行われた可能性が高い。やや時期は下るが、百済の武寧王の場合、亡くなってから王陵に埋葬されるまで2年3ヶ月、武寧王妃の場合、2年2ヶ月の空白期間があり、モガリの期間であったと推定されている[キムウォルリョンほか1974b]。ここまで長期間のモガリ儀礼を想定しなくても、被葬者が亡くなってから古墳の築造を開始しても十分な時間があることがわかる。また、前述したように、木槨の途中に埋葬・副葬行為のための中断面が存在するとすれば、被葬者の埋葬行為までに築造されていた部分は、基底部から高さ2～3mの木槨、側部積石部、1次墳丘のみであったことになり、数ヶ月で構築できた可能性がある。したがって、必ずしも寿陵であることを前提として考える必要はなく、むしろ古墳の大部分は被葬者の死後に築造が始まったのではないかと推定される。

これを前提として、埋葬プロセスを復元してみる(表1)。まず、被葬者の生前に古墳の選地が行われたと推定される。その際に何らかの儀礼が行われた可能性が高いが、皇南大塚の発掘調査では確認されていない<sup>(20)</sup>。

次に被葬者の死を契機にして、本格的な古墳の築造作業が開始される。これと併行してモガリ儀礼が行われたものと推定される。百済の武寧王の場合、王陵がある宋山里古墳群の北側に位置する艇止山遺跡でモガリが行われたと推定されているので、新羅の場合も古墳の近くにモガリ儀礼を行う施設があった可能性が高い。

モガリ儀礼を行っている間に古墳の築造が進められる。まず、古墳基底部の構築や整地が行われ、南墳の場合は基底部に浅い墓壙が掘削される。ただし、古墳基底部の構築については、被葬者の生前に行われていた可能性もある。

次に木槨の構築、木槨側部積石部の構築、1次墳丘の構築が同時併行で行われる。外槨、中槨、内槨を構築するとともに、木槨周囲に槽状建造物を構築し、その中に石を詰め込み、さらにその外側に1次墳丘を構築する。木槨を構築する過程で床面に赤色顔料が塗布されており、木槨構築にとまなう儀礼が行われたものと推定される。高さ約2mくらいまで木槨、側部積石部、1次墳丘を構築した段階で古墳の築造を一時中断し、被葬者の埋葬と副葬品の埋納が行われる。まず、内槨の木棺内に被葬者が入った木棺が搬入され、内槨の副葬品に装身具類、武器・武具類、金属・ガラス製容器類、漆器類、土器類などを副葬する。また、内槨周囲の石壇部分には殉葬者を埋葬する。さらに南墳の場合には副槨に、北墳の場合は石壇東側部分に容器類と鉄器類を副葬する。

これら一連の埋葬・副葬行為が終了した後に、南墳の場合、内槨・中槨が閉塞され、次にこれらより上部の外槨、側部積石部、1次墳丘の構築が進められる。側部積石部と1次墳丘が完成した後に外槨の閉塞が行われているので、内槨・中槨の閉塞と木槨、側部積石部、1次墳丘の構築は一部重複して行われたと考えられる。この過程で木槨上部に土器類、装身具類、鉄器類、馬具類が副葬される。前述したように、これらは殉葬の痕跡である可能性も否定できない。以上、古墳基底部の構築・整地から木槨の閉塞までは、埋葬主体部の構築と被葬者の埋葬、副葬品の埋納という一連の行為であり、埋葬プロセスの第1段階ととらえることができる。

表1 新羅の大型積石木槨墓の埋葬プロセス

築造工程		埋葬・儀礼行為		
○古墳の選地		○(古墳築造前の儀礼)		前段階
被葬者の死				
○古墳基底部の構築・整地 ・土、粘土、小礫を敷いて基底部を構築する(南墳)。 ・古墳築造場所の整地作業を行う(北墳)。		中間に古墳築造の中断面が存在  同時併行で進行	○(モガリ儀礼)	第1段階
○墓壇の掘削(南墳主槨のみ) ・基底部上面から浅い墓壇を掘削する。			○木槨構築にともなう儀礼 ・木槨床面(基底部)や内槨内面に赤色顔料が塗布される。	
○木槨の構築 ・外槨、中槨、内槨を同時並行で構築する。 ・内槨の周囲に石壇を設ける。			○木槨内への被葬者の埋葬と副葬品の埋納 ・内槨の木棺槨内に被葬者が埋葬された木棺が搬入される。 ・内槨の副葬品槨に装身具類、武器・武具類、金属・ガラス製容器類、漆器類、土器類などを副葬する。 ・内槨周囲の石壇部分に殉葬者を埋葬する。 ・南墳の場合には副槨に、北墳の場合は石壇東側部分に容器類と鉄器類を副葬する。	
○木槨側部積石部の構築 ・木槨の周囲に槽状建造物を構築する。 ・槽状建造物に合わせて断面形が台形になるように積石を行う。				
○1次墳丘の構築 ・側部積石部の外側に1次墳丘を構築し、周囲に護石をめぐる。				
○木槨の閉塞 ・内槨の蓋を閉じた後に、中槨および外槨の天井部を閉塞する。		○木槨上部への副葬 ・木槨(中槨?)上部に土器類、装身具類、鉄器類、馬具類を副葬する(殉葬者の埋葬?)。		第2段階
○木槨上部積石部の構築 ・木槨上部に石を積み上げる。		○上部積石部における儀礼 ・上部積石部に赤色顔料を散布・塗布する(南墳)。 ・土器や雲母を用いた儀礼が行われる。		
○1次墳丘の粘土密封 ・上部積石部の全体および1次墳丘の一部を粘土層で密封する。		○1次墳丘の粘土密封にともなう儀礼 ・上部積石部の全体および1次墳丘の一部を粘土層で密封する過程で木炭を散布し、土器を用いた儀礼が行われる。		
○1次墳丘上部の木造建造物の構築(南墳のみ) ・積石部の上部(密封粘土層の上面)に木柱を立てて木造建造物を構築する。		○1次墳丘上部の木造建造物における儀礼(南墳のみ) ・積石部の上部(密封粘土層の上面)に構築された木造建造物で土器を用いた儀礼が行われる。		
古墳築造の休止面				第3段階
○2次墳丘の構築 ・1次墳丘の上部に2次墳丘を構築する。 ・2次墳丘の表面を粘土で被覆する。		○2次墳丘構築にともなう儀礼 ・墳丘頂上部付近に馬具類が埋納され、土器類を供献する儀礼が行われる。		

次に木槨上部に石を積み上げて、上部積石部を構築する。上部積石部を構築する途中、あるいは構築後に赤色顔料を散布・塗布したり、土器や雲母を用いた儀礼が行われる。つづいて、上部積石部の全体および1次墳丘の一部を粘土層で密封する。粘土層で密封する過程で木炭を散布し、土器を用いた儀礼が行われる。<sup>(22)</sup> 皇南大塚南墳の場合はこの密封粘土層上面に木造建造物が造られ、土器を用いた儀礼が行われている。この儀礼は構築物にともなうものであり、一定期間継続して行われたものと推定されるので、密封粘土層の上面が古墳築造の休止面と考えられる。これら上部積石部の構築、粘土密封、木造建造物の構築は1次墳丘の密封という一連の作業であり、埋葬プロセスの第2段階となる。

1次墳丘上で一定期間の儀礼が行われた後に、その上部に2次墳丘を構築する。2次墳丘の構築においては、区画盛土方式が採用された可能性がある。次に、2次墳丘の表面を粘土で被覆するが、

墳丘の盛土と粘土による被覆は同時併行で行われた可能性が高い。2次墳丘構築にともなって墳丘頂上部付近に馬具類が埋納され、土器類を供献する儀礼が行われる。これによって、古墳が完成し、一連の儀礼が終了する。2次墳丘の構築とそこで執り行われた儀礼は古墳を仕上げる最終工程であり、これを埋葬プロセスの第3段階とする。

以上、大型積石木槨墓の埋葬プロセスを復元した結果、古墳構築の諸段階において多くの儀礼行為が行われていることがわかる。そのなかでも、とくに第1段階における中断面および第2段階と第3段階の間における休止面は、重要な儀礼が行われた場所であったと考えられる。まず、第1段階における中断面は被葬者の埋葬と副葬品の埋納にともなって、木槨の構築、木槨側部積石部の構築、1次墳丘の構築を一時中断したものである。中断期間はそれほど長期間にわたるものではないかもしれないが、被葬者の埋葬行為という埋葬プロセスの中で最も重要な行為が行われた場所である。積石木槨墓は埋葬主体部が造られた後に2次墳丘が構築される、いわゆる「墳丘後行型」に属する古墳であるが、この中断面の存在は1次墳丘の築造、埋葬主体部の構築、被葬者の埋葬行為などが一連の過程の中で行われる、いわゆる「同時進行型」に属する古墳でもあることを示している[和田1989]。日本においても前期古墳の竪穴式石室に、埋葬行為にともなう壁体構築の中断面が存在することが指摘されており[岡林2012]、墳丘先行型という違いはあるが、共通点として認識できる。

これに対し、第2段階と第3段階の間の休止面については、木造建造物も造られており、ある程度長期間にわたって儀礼が行われたものと推定される。これは主体部内から出土した遺物と2次墳丘上部に埋納された遺物に時期差が認められることから裏付けられる。古墳で執り行われた諸儀礼の中でもとくに重要な儀礼が行われた場所であった可能性がある。日本の古墳においても築造工程の重要な節目には儀礼をおこなうための休止期間がもうけられる場合があることが指摘されており、古墳に木柱を立てる例や、兵庫県神戸市住吉東古墳のように、1次墳丘の上面に建物跡が確認されている例もある<sup>(23)</sup>[土生田1991・1995]。墳丘の築造過程で構築物を造って儀礼を行うという休止期間が、日韓で共通して認められることは注目すべきであろう。盛土工程における休止期間については、儀礼だけでなく土木工学的な意味もあったようである。一定期間、盛土を中止し盛土が沈下して強固となった後に再び盛土を行うという工程を繰り返すことによって墳丘を構築すると、墳丘の崩壊を防ぐことができるという[ホンボシク2013]。大型積石木槨墓の場合も、下部の1次墳丘を強固にするために、ある程度長い休止期間をもうけて、その間に儀礼が行われたものと考えられる。

最後に埋葬プロセスからみた皇南大塚南墳・北墳の被葬者の問題に触れておきたい。皇南大塚南墳・北墳の年代観と被葬者については、これまで多くの議論がある。まず、皇南大塚南墳の築造年代に関するこれまでの見解を大別すれば、5世紀初頭説[イヒヂュン1995、イウンソク1999、イジョンソン2000]と5世紀中葉説[藤井1979、毛利光1983、キムヨンソン1998、キムデファン2001]に分けられる<sup>(24)</sup>。被葬者については、5世紀初頭説の場合は17代奈勿王(在位：356～402年)に、5世紀中葉説の場合は19代訥祇王(在位：417～458年)に比定するのが一般的である<sup>(25)</sup>。ただし、被葬者問題については、被葬者を示す銘文資料が出土しているわけではないので、いまだ未解明の部分も少なくない。一方、北墳の年代については、南墳より下ることは確実であるので、南墳を5世紀初頭とする場合は5世紀前半に、南墳を5世紀中葉とする場合は5世紀後葉に比定される。北墳の被

葬者については、前述したように副葬品塚から「夫人帯」銘銀製鈿帯が出土していることから、報告書では南墳の被葬者の夫人である可能性が高いとされる<sup>(26)</sup>。したがって、南墳の後に北墳が造られたことは明らかであるが、これまで両古墳の時期差については、それほど大きくはないと考えられてきたようである。しかし、前述したように南墳の1次墳丘上面における休止期間が長いとすると、南墳と北墳の時期差は必ずしも小さいとはいえず、両古墳の被葬者が夫婦である可能性は低くなる。また、仮に両古墳の被葬者が夫婦であるとすれば、当然、南墳の築造時には続いて北墳が構築されることが想定されていたはずである。そうであれば、南墳の基底部を構築する際に、北墳を築造する部分まで整地を行っていたはずである。しかし、南墳と北墳では基底部の構築方法が異なっており、南墳の構築時には北墳の基底部はまだ造られていなかった可能性が高い。これは北墳の被葬者が南墳構築時にはまだ同一地点に埋葬される予定ではなかった人物であることを示しているといえる。北墳の基底部整地時に南墳の墳丘北側の一部をわざわざ壊していることもこれを裏付けている。また、夫婦合葬墓が皇南大塚のような瓢形墳の形態をとるのであれば、王族の古墳のほとんどが瓢形墳でなければならないはずであるが、実際はそれほど多くはない<sup>(27)</sup>。このように考えると、南墳と北墳の被葬者は夫婦ではない可能性が高いことがわかる。したがって、北墳の被葬者は仮に女性であっても、南墳の被葬者の夫人ではなく、北墳は南墳の被葬者との系統・系譜関係を強調するために南墳に接して築造されたとみるのが妥当であろう<sup>(28)</sup>。

## 結語

以上、皇南大塚南墳と北墳の築造工程と古墳で執り行われた埋葬・儀礼行為を検討し、5世紀代における新羅の大型積石木槨墓の埋葬プロセスを総合的に復元した。その結果、埋葬プロセスは大きく3段階に分けることができた。まず、第1段階は古墳基底部の構築・整地、墓壙の掘削、木槨の構築、木槨側部積石部の構築、1次墳丘の構築、木槨の閉塞が行われる段階である。すなわち、1次墳丘と埋葬主体部の構築、および被葬者の埋葬、副葬品の埋納行為が行われる段階といえる。このうち木槨の構築、木槨側部積石部の構築、1次墳丘の構築は同時併行で行われたものと推定され、1次墳丘を構築してから内部に木槨を構築したのではないと考えられる。また、この第1段階に古墳築造の中断面が存在することを指摘した。この中断面は被葬者の埋葬行為にともなうものであり、大型積石木槨墓は被葬者の埋葬行為が埋葬主体部の築造の過程で行われる「同時進行型」古墳であることを示している。次に第2段階は上部積石部の構築、粘土密封、木造建造物の構築が行われる段階である。すなわち、1次墳丘の密封行為が行われる段階といえる。この第2段階の最後に古墳築造の休止面が存在し、ある程度の長期間にわたって儀礼が行われたものと推定した。1次墳丘の上面が一連の埋葬プロセスにおける重要な儀礼の場であったことを示している。第3段階は2次墳丘の構築が行われる段階である。古墳構築における最終段階であり、墳頂部で最後の儀礼が行われる。

積石木槨墓は埋葬主体部への埋葬が終了した後に2次墳丘が構築されているので、「墳丘後行型」古墳に該当するが、1次墳丘は埋葬主体部と同時併行で構築されているので、埋葬行為が行われる段階にはすでにある程度の高さまで1次墳丘が築かれていたことになる。したがって、典型的な「墳



丘後行型」古墳である地下式木槨墓とは、埋葬行為とそれにもなう儀礼行為が行われる場が異なっていたと考えられる。

皇南大塚南墳と北墳は、前者が主・副槨式、後者が単槨式という違いがあり、埋葬プロセスも細部においては違いもみられる。南墳と北墳の埋葬プロセスを比較すると、前者の方がやや複雑であり、後者は簡略化された部分が確認できる。南墳をへて北墳段階に至って大型積石木槨墓の埋葬プロセスが確立したものと考えられる。ただし、基本的な構築方法については南墳と北墳で共通していることから、同じ造墓集団によるものであり、相互に継承関係があることは明らかである。しかし、南墳と北墳の被葬者は夫婦ではなく、北墳の構築は南墳の構築時にはまだ予定されていなかった可能性を指摘した。5世紀代の新羅の中心部ではまだ夫婦を同一墳墓に合葬するという風習は普及していなかったものと考えられる。

皇南大塚南墳はこれまで発掘調査が行われた大型積石木槨墓のうち、最古段階に位置づけられる古墳であり、新羅王権の確立を象徴的に示すものとして注目されてきた。大型積石木槨墓は多くの副葬品をもつだけでなく、複雑な築造工程で造られており、これに合わせて複数回にわたる儀礼行為が行われている。つまり、大型積石木槨墓は原三国時代後期から続く木槨墓の最終形態であるとともに、厚葬墓の頂点に位置づけられる墓制であるといえる。皇南大塚南墳はそれ以前の積石木槨墓と比較すると、古墳規模や副葬品の質・量だけでなく、埋葬プロセスの複雑性においても大きく飛躍している。大型積石木槨墓は木槨墓の伝統を維持しながらも、それ以前にはなかった新たな要素を導入して創出された王族の古墳であると考えられる。皇南大塚南墳が新羅王陵の出現期を、北墳がその確立期を示すものといえるだろう。

#### 付記

本稿は2012年10月に行われた国立歴史民俗博物館共同研究「東アジアにおける倭世界の実態」第3回研究会における発表内容をもとにまとめたものである。研究会や見学会を通じて様々なアドバイスをいただいた共同研究のメンバーにお礼申し上げたい。また、本稿で積石木槨墓の埋葬プロセスをテーマとして取り上げたのは、2012年に専修大学で招聘したウリ文化財研究院のシムヒョンチョル氏との議論がきっかけであった。当時、シムヒョンチョル氏が釜山大学校に提出したばかりの修士論文を拝読し、近年の韓国における積石木槨墓研究の進展に強い刺激を受けた。また、滞在期間中に積石木槨墓の構造と築造工程について様々なご教示をいただいた。本稿の内容もシムヒョンチョル氏の研究成果によるところが大きい。また、資料収集にあたっては、東亜細亜文化財研究院のチェギョンギュ（崔景圭）氏にご協力いただいた。文末ではあるが、ご教示・ご協力いただいた方々にお礼申し上げたい。

#### 註

(1)——吉井秀夫は、朝鮮半島の墳墓を墳丘と埋葬施設の構築順序によって、墳丘が築造された後に墳丘内に埋葬施設が造られ、主な葬送儀礼が墳丘上で行われる「墳丘先行型」墳墓と、埋葬主体部への埋葬が終了した後に

墳丘が構築され、諸儀礼が墳丘構築以前の埋葬施設周囲の空間で行われる「墳丘後行型」墳墓に分けて、墓制の地域性を抽出し、それが長期間継続することを明らかにした〔吉井2001・2002・2010〕。また、韓国学界におい

ては、イソンチュが墳墓構築における長期持続的属性に着目して、埋葬主体部を設置した後にそれを密封する封土を構築する「封土墳」と、墳丘を構築した後にその内部に埋葬主体部を造る「墳丘墓」に分類し、地域ごとの墳墓の多様性は造営集団の社会的・理念的戦略に起因するものであると解釈している〔イソンチュ 2000〕。

(2)——報告書で「木造架構」とよばれているものがあるが、その形態から「槽状建造物」とした。

(3)——チョヨンヒョンの区画盛土法説に対し、青木敬は高さ10m以上の区画石列を積み上げることは困難であり、仮に区画盛土法が用いられたのであれば、区画石列が累重的に構築された痕跡が確認されなければならないとして、疑問を提示している〔青木 2005〕。

(4)——チョヨンヒョンは主体部または積石部の表面を覆う粘土層を「密封」層とし、墳丘表面の粘土層を「被覆」層としており、本稿もこの用語に従うこととする。なお、皇南大塚南墳・北墳では、墳丘の盛土と粘土の被覆は同時併行で行われた可能性があるとする。

(5)——墳丘の区画盛土については、墳丘から石列や黒色粘土帯が確認されれば、平面と断面に対する綿密な検討なしに、無批判的に区画盛土と判断される場合が少なくないという問題点も指摘されている〔ホンボシク 2013〕。また、近年の調査において、これまで区画盛土の根拠とされてきた石列について、排水施設であると解釈する場合もみられる〔クァクジョンチョルほか 2014〕。

(6)——この「四方積石木槨墓」、「上部積石木槨墓」、「地上積石木槨墓」は、それぞれイヒヂュンの「四方積石式」、「上部積石式」、「地上積石式」に該当する。

(7)——「墓」を墓形による分類名称とし、「墳」を墳形による分類名称として、両者を区別する点に特徴がある。墓形よって四方積石木槨墓、上部積石木槨墓、地上積石木槨墓に、墳形によって積石封土墳と封土墳に分類している。すなわち、それまで曖昧に使用されてきた「積石木槨墓」と「積石木槨墳」という用語に対して、積石木槨という墓形の特徴からみれば、いずれも「積石木槨墓」であるとする。ただし、積石木槨墓のうち、地上積石木槨墓の上部に積石封墳をもつもの(積石木槨積石封土墳)については、墳形が重要な意味をもっているので「積石木槨墳」とよぶとした。しかし、全体を「積石木槨墓」としつつも、積石墳丘をもつ地上式積石木槨墓のみを「積石木槨墳」として、「積石木槨墓」と区別するのはやや複雑であり、墳形には「積石封土墳」や「封土墳」という分類単位以外にも「円墳」や「瓢形墳」という分類単

位が存在する。したがって、本稿では積石墳丘をもつ地上式積石木槨墓も含めて、「積石木槨墓」という用語で統一する。

(8)——イヒヂュンの地上積石式、キムデファンの積石木槨墳(積石木槨積石封土墳)に該当する。

(9)——青木敬は新羅の積石木槨墓の多くは構築を途中で中断することはなく、埋葬施設と墳丘を順に間断なく築造するのが新羅地域の古墳の特徴であるとする〔青木 2005〕。

(10)——チョヨンヒョンも慶州の大型積石木槨墓の木槨は、その規模から「外槨」を「室」とみて「木室」という用語を用いるのが妥当であるとする〔曹永鉉 2003〕。

(11)——報告書では南墳の木槨構造を外槨と内槨からなる二重槨ととらえ、内槨の中に外槨が設置され、その中に内槨が置かれたとしている。しかし、キムヨンソンが指摘するように、外槨は木槨床面に設置されており、外槨内部の東側に副葬品を配置する空間(副葬品槨)が設けられていることから、外槨は槨構造を備えた内槨ととらえることが妥当である〔キムヨンソン 2007〕。したがって、南墳の木槨構造は、外側から外槨、中槨、内槨の三重槨ととらえることができ、内槨の中が副葬品槨と木槨槨に分けられ、木槨槨の中に木槨が配置されたと考えた。

(12)——報告書の本文では、「土壌内には周辺古墳床面と同じ高さに河原石を2~3層敷いている。木槨の側壁は、この河原石の上から立ち上がっているが、東西長6.5m、南北幅4.1mであり、長軸はちょうど東西方向を指している。木槨の側壁内には、さらに直径約4~5cmの小礫を厚さ20cmほど敷いて木槨の床面を構築している。〔キムジョンギほか 1994 : p.34〕と記されている。しかし、報告書の図面11(本稿の図6-1)では、木槨の床面である小礫層の上に外槨が構築されているように描かれており、本文の内容と合わない。これを検証する材料をもちあわせていないが、本稿では本文の記述に従った。

(13)——報告書では「下部封土」と「上部封土」とされているが、キムドゥチョルやシムヒョンチョルの研究にしたがって、それぞれ「1次墳丘」と「2次墳丘」とした。なお、韓国の考古学界でよく用いられている「封土」という用語については、「墳丘」に統一した。

(14)——皇南大塚の2次墳丘が区画盛土方式によって築造されたか否かについては、発掘調査時にまだそのような視点がなかったことから、現在としては不明といわざるをえない。ただし、新羅との関係が強い慶尚南道昌

寧地域では、校洞1号墳のように墳丘中の黒色粘土帯が石室上部から墳丘上部まで続き、確実に区画盛土方式によって築造されたことがわかる事例があるので〔シムボンゲンほか1992〕、皇南大塚の場合も区画盛土方式によって築造された可能性はあるだろう。

(15)——イウンソクは副葬品の配置状況などから、石壇の上面に2人が殉葬されていたと推定している〔イウンソク1999〕。

(16)——加耶や新羅における殉葬問題については、これまでも多くの研究があり〔クオンオヨン1992、キムスファン2005、キムセギ2014〕、近年もその事例が増えつつある〔イソンヂュン2010〕。ただし、殉葬を認定する場合、確実に同時埋葬であることが前提となるが、これを実証するためには、古墳における埋葬プロセスを復元し、どの段階で殉葬が行われたのかを明らかにする必要がある。殉葬問題については別稿で取り上げたい。

(17)——報告書では北墳の木槨構造について、木槨の中に外棺が設置され、その中に内棺が納められているとするが、南墳の場合と同様に、一番外側の木槨を外槨、外棺を内槨とし、内槨の中に木棺が納められているととらえたい。

(18)——イウンソクは石壇上面から装身具類が出土しているとして、南墳と同様に石壇上面に2人の殉葬者が埋葬されていたと推定している。さらに、頸胸飾類の出土状況から、内槨と木棺の間にも頭部のみ2人分が殉葬されていたとする〔イウンソク1999〕。

(19)——古墳の築造工程や、そこで執り行われた埋葬・儀礼行為については、これまで日本において多くの研究が行われてきた。和田晴吾は墳丘先行型墳墓の築造と埋葬手順を古墳以外の場と古墳の場に分けて復元している〔和田1989・1995・2009・2014〕。前者で行われるのは、①首長の死、②モガリ儀礼、③遺体の古墳への搬入であり、後者で行われる築造工程は、①選地、②墳丘の築造、③埋葬施設の構築、④墓壙の埋めもどし、⑤葺石・埴輪の整備であり、埋葬・儀礼行為は、①地鎮儀礼、②納棺・埋納儀礼、③墓上儀礼、④墓前儀礼であるとする。土生田純之は古墳の構築過程と儀礼の関係について、(儀礼)→選地→儀礼→基礎工事→被葬者の死→モガリ→工事・儀礼→埋葬・儀礼→工事→(竣工)→儀礼という基本プロセスを提示している〔土生田1995〕。日高慎は古墳時代の人の死に際して執り行われる儀礼について、0.築造の各段階において儀礼を行う(墳丘築造中)、1.死を受け入れずに甕を固める(死の確認)、2.死を受け入れ死者から生者への何らかの移行を図る(死の決定)、3.死

者を埋葬することで完全に生者との関係を断つ(死者の埋葬)、4.埋葬後に追悼儀礼を行う(死者の慰撫)という過程・場面を想定している〔日高2012〕。もちろん、これらは日本の古墳時代に多くみられる墳丘先行型墳墓の場合を想定して作成された部分が多いが、積石木槨墓との共通性も少なくない。本稿ではこれらの諸見解も参考にして、積石木槨墓の埋葬プロセスの復元を行った。

(20)——土生田純之は、日本列島の古墳で墳丘盛土直下の旧地表面上で確認されている焚火の痕跡や土器の埋置を古墳築造前の儀礼の痕跡ととらえている〔土生田1995〕。新羅の積石木槨墓においても古墳築造前に儀礼が行われた可能性が高い。

(21)——日本の古墳では「据えつける棺」と「持ちこぶ棺」があることが明らかにされている〔和田1995〕。皇南大塚南墳と北墳の木棺は鉄釘を用いない組合式木棺と推定されているので、かなりの重量があったものと考えられる。したがって、木槨構築の際に木棺が据えつけられていた可能性も否定できない。しかし、内槨に直接埋葬するのではなく、内槨の中にわざわざ木棺を入れて埋葬していることからみて、木棺はあとから運び込まれたものと推定した。

(22)——日本の古墳においても、古墳築造前や築造途中で炭や土器を用いた儀礼の痕跡が多く確認されており〔土生田1995〕、新羅と倭の古墳築造にともなう儀礼に何らかの共通性があるのかもしれない。

(23)——古墳に立てられた木柱の多くは靈魂を呼び寄せるための依代の役割を果たすものであり、住吉東古墳で確認された建物跡については、モガリの施設であると推定されている。

(24)——この他にも皇南大塚南墳の年代を4世紀中葉までさかのぼらせる見解もある〔チェビョンヒョン1992〕。また、5世紀中葉説の場合も5世紀第2四半期とする見解〔早乙女2010・2012〕と5世紀第3四半期とする見解〔キムヨンソン1998、キムデファン2001〕がみられる。また、白井克也による日韓古墳編年の並行関係に関する研究によれば、皇南大塚南墳(新羅ⅡA期中段階)は日本の陶邑編年のTK216型式段階と併行するとされる〔白井2003〕。

(25)——皇南大塚南墳の被葬者については、これらの見解の他に、訥祇王に殺害された実聖王とする見解もある〔ハムスンソプ2010〕。また、南墳の被葬者が金製ではなく金銅製の出字形立飾冠を身に付けていたことから、王(麻立干)ではなく、訥祇王の弟で智証王の父である習宝(基宝)葛文王であるとする非王陵説もある〔キム



ソンヂュ 2002]。

(26)——キムヂェホン(金在弘)は、皇南大塚北墳の「夫人帯」銘銀製鍔帯は被葬者が直接身につけた状態で出土したのではなく、副葬品塚から出土していることから、王妃(夫人)は「夫人帯」銘銀製鍔帯の製作者(注筆者)・使用者(所有者)ではあるが、必ずしも王妃が北墳の被葬者であることを示すものではないとする[キムヂェホン 2014]。また、イヂュホン(李柱憲)は北墳の被葬者を王妃ではなく、南墳の次の男王(慈悲麻立干)とみている[イヂュホン 2014・2015]。

(27)——シムヒョンチョルの集成によれば、積石木槨墓123基のうち、瓢形墳の形態をとるものはわずか10基に過ぎない[シムヒョンチョル 2012・2013]。

(28)——土生田純之は日本の古墳時代において、偉大な始祖の古墳と隣接する位置に埋葬されることが、被葬

者の社会的立場を明示することになっていたと指摘する[土生田 2008・2010]。また、田中良之は慶尚南道金海市礼安里古墳群の親族関係の分析において、墳墓の切り合いは新たな死者と先行する死者との系譜関係を強調するための行為であることを明らかにした。さらに、新羅圏の江原道東海市湫岩洞古墳群と金海市柳下里古墳の出土人骨に対するキムヂェヒョン(金宰賢)の分析結果[キムヂェヒョン 1996・1998]をもとに、新羅は双系社会であった可能性が高く、百済のように夫婦合葬墓が存在する父系社会とは異なることを指摘している[田中 2002]。女性被葬者が埋葬された皇南大塚北墳が、男性被葬者が埋葬された南墳に匹敵する墳丘規模や副葬品量・質をもち、副葬品塚には環頭大刀などの武器類が副葬されている理由も双系社会であれば、うまく説明できるだろう。

#### 参考文献(五十音順)

(日本文)

- 青木 敬 2005 「韓国の古墳における墳丘構築法—墳丘断面からみた検討—」『専修考古学』第11号  
青木 敬 2009 「古墳築造からみた生前墓」『墓から探る社会』雄山閣  
梅原末治 1931・1932 『慶州金鈴塚飾履塚発掘調査報告』大正十三年度古跡調査報告第一冊、朝鮮総督府  
梅原末治 1947 『朝鮮古代の墓制』座右宝刊行会  
岡林孝作 2012 「竪穴系埋葬施設(含棺)」『古墳時代研究の現状と課題 上—古墳研究と地域史研究』同成社  
小泉顕夫 1927 「瑞鳳塚の発掘」『史学雑誌』38-1  
早乙女雅博 2010 『新羅考古学研究』同成社  
早乙女雅博 2012 「考古学からみた新羅の国家形成」『メトロポリタン史学』第8号  
白井克也 2003 「新羅土器の型式・分布変化と年代観—日韓古墳編年の並行関係と暦年代—」『朝鮮古代研究』第4号  
曹 永 鉉(吉井秀夫訳) 2003 「古墳封土の区画築造に関する研究」『古墳構築の復元的研究』雄山閣  
高久健二 1999 「楽浪彩篋塚(南井里116号墳)の埋葬プロセス—その復元的研究と諸問題の考察—」『朝鮮文化研究』第6号  
高久健二 2014 「朝鮮三国時代の王墓」『アジアの王墓』高志書院  
田中良之 2002 「三国時代の親族関係(予察)」『韓半島考古学論叢』すずさわ書店  
土生田純之 1991 「古墳における儀礼の研究—木柱をめぐって—」『九州文化史研究所紀要』第36号(土生田純之 1998 『黄泉国の成立』学生社所収)  
土生田純之 1995 「古墳構築過程における儀礼—墳丘を中心として—」『古墳文化とその伝統』勉誠出版(土生田純之 1998 『黄泉国の成立』学生社所収)  
土生田純之 1998 『黄泉国の成立』学生社  
土生田純之 2008 「国家形成と王陵—古代朝鮮と「東国」の事例から—」『国家形成の考古学』現代の考古学7、朝倉書店  
土生田純之 2010 「始祖墓としての古墳」『古文化談叢』第65集  
濱田耕作ほか 1924・1927 『慶州金冠塚と其遺宝』古跡調査特別報告第三冊、朝鮮総督府  
日高 慎 2012 「葬送儀礼」『古墳時代研究の現状と課題 上—古墳研究と地域史研究—』同成社  
藤井和夫 1979 「慶州古新羅古墳編年試案—出土新羅土器を中心として—」『神奈川考古』第6号  
茂木雅博 1994 『古墳時代寿陵の研究』雄山閣  
毛利光俊彦 1983 「新羅積石木槨墳考」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 文化財論叢』同朋舎出版

- 吉井秀夫 2001 「百濟の墳墓」『東アジアと日本の考古学 I 墓制①』同成社
- 吉井秀夫 2002 「朝鮮三国時代における墓制の地域性と被葬者集団」『考古学研究』第 49 卷第 3 号
- 吉井秀夫 2010 『古代朝鮮 墳墓にみる国家形成』諸文明の起源 13, 京都大学学術出版会
- 和田晴吾 1989 「葬制の変遷」『古墳時代の王と民衆』古代史復元第 6 卷, 講談社 (和田晴吾 2014 『古墳時代の葬制と他界観』吉川弘文館所収)
- 和田晴吾 1995 「棺と古墳祭祀—『据えつける棺』と『持ちはこぶ棺』—」『立命館文学』第 542 号 (和田晴吾 2014 『古墳時代の葬制と他界観』吉川弘文館所収)
- 和田晴吾 2009 「古墳の他界観」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 152 集 (和田晴吾 2014 『古墳時代の葬制と他界観』吉川弘文館所収)
- 和田晴吾 2014 『古墳時代の葬制と他界観』吉川弘文館  
(韓国文)
- 이운석 (李恩碩) 1999 「慶州 皇南大塚 構造에 대한 一考察」『考古歷史學志』第 15 輯
- 이송진 (이성주 李盛周) 1996 「新羅式 木槨墓의 展開와 意義」『제 20 회 한국고고학전국대회 新羅考古學의 諸問題』韓國考古學會
- 이송진 (이성주 李盛周) 2000 「墳丘墓의 認識」『韓國上古史學報』第 32 號
- 이송진 (이성준) 2010 「창녕 송현동 고분군의 순장자와 순장문화」『특별전 비사벌』국립가야문화재연구소·국립김해박물관·창녕박물관·대가야박물관
- 이재흥 (李在興) 2007 「경주지역 적석목곽묘의 출현과정에 대한 일고찰」『嶺南考古學』第 43 號
- 이주헌 (李柱憲) 2014 「皇南大塚 北墳 被葬者 性格 再考」『釜考研』108, 釜山考古學研究會
- 이주헌 (李柱憲) 2015 「경주 황남대총 북분 주인공 성격 재고」『新羅文化』Vol.45
- 이종선 (李鍾宣) 2000 『古新羅王陵研究』學研文化社
- 이희준 (李熙濬) 1995 「경주 皇南大塚의 연대」『嶺南考古學』第 17 號
- 이희준 (李熙濬) 1996 「경주 月城路 가-13 호 積石木槨墓의 연대와 의의」『碩晤尹容鎭教授停年退任紀念論叢』碩晤尹容鎭教授停年退任紀念論叢刊行委員會
- 이희준 (李熙濬) 2007 『新羅考古學研究』社會評論
- 강인구 (姜仁求) 1981 「신라 積石封土墳의 구조와 계통」『韓國史論』7 (姜仁求 1984 『三國時代墳丘墓 研究』嶺南大學校 出版部 所収)
- 강인구 (姜仁求) 1991 「新羅古墳研究에 있어서의 몇 가지 補正」『先史와 古代』1
- 김우올리온 (김원룡 金元龍) ほか 1974a 『天馬塚發掘調査報告書』文化公報部文化財管理局
- 김우올리온 (김원룡 金元龍) ほか 1974b 『武寧王陵發掘調査報告書』文化公報部文化財管理局 (永島暉臣 慎 訳 1974 『武寧王陵』学生社)
- 김수환 (金秀桓) 2005 『金官加耶殉葬墓研究』釜山大學校大學院 考古學科 文學碩士 學位論文
- 김세기 (김세기 金世基) 2014 「대가야의 묘제와 순장」『대가야의 고분과 산성』대가야학술총서 9, 대동문화재단  
구원·고령군·대가야박물관
- 김선주 (金善珠) 2002 「皇南大塚의 주인공 재검토」『淸溪史學』16·17
- 김재현 (金宰賢) 1996 「金海柳下里 傳 王陵 出土人骨」『東義史學』9·10
- 김재현 (金宰賢) 1998 「東海市湫岩洞 B 地區古墳群의 埋葬과 副葬行爲」『文物研究』第 2 號
- 김재홍 (金在弘) 2014 「'이사지왕' 명 대도와 금관총의 주인공」『考古學誌』第 20 輯
- 김정기 (金正基) ほか 1985 『皇南大塚北墳發掘調査報告書』文化財管理局文化財研究所
- 김정기 (金正基) ほか 1994 『皇南大塚南墳發掘調査報告書』文化財管理局文化財研究所
- 김대환 (金大煥) 2001 「嶺南地方 積石木槨墓의 時空의 變遷」『嶺南考古學』第 29 號
- 김두철 (金斗喆) 2009 「積石木槨墓의 구조에 대한 비판적 검토」『古文化』第 73 號
- 김용성 (金龍星) 1998 「新羅의 高塚과 地域集團 - 大邱·慶山의 例 -」춘추각
- 김용성 (金龍星) 2007 「신라 적석봉토분의 지상식 매장구체시설 검토」『韓國上古史學報』第 56 號
- 곽종철 (郭鍾喆) ほか 2014 『昌寧 校洞과 松峴洞 古墳群 — 第 I 群 7 號墳과 周邊 古墳—』學術調査報告 71 冊, 우리文化財研究院
- 권오영 (權五榮) 1992 「고대 영남지방의 殉葬」『韓國古代史論叢』4, (財) 駕洛國史蹟開發研究院
- 심현철 (沈炫澈) 2012 『新羅 積石木槨墓의 構造 研究』釜山大學校大學院 考古學科 文學碩士 學位論文

- 
- シムヒョンチョル (심현철 沈炫徹) 2013「新羅 積石木槨墓의 구조와 축조과정」『한국고고학보』88輯  
シムボングン (심봉근 沈奉謹) ほか 1992『昌寧校洞古墳群』古蹟調査報告 第21冊, 東亞大學校 博物館  
シンギョンチョル (신경철 申敬澈) 1985「古式鎧子考」『釜大史學』第9輯(定森秀夫訳1986「古式鎧考」『古代文化』  
第38卷第6号)  
チェジョンギョ (최종규 崔鍾圭) 1983「中期古墳의 性格에 대한 약간의 考察」『釜大史學』第7輯(定森秀夫訳1984「韓  
国・中期古墳の性格に対する若干の考察」『古代文化』第36卷第12号)  
チェビョンヒョン (최병현 崔秉鉉) 1981「古新羅 積石木槨墳의 變遷과 編年」『韓國考古學報』10・11  
チェビョンヒョン (최병현 崔秉鉉) 1992『新羅古墳研究』一志社  
チェビョンヒョン (최병현 崔秉鉉) 2000「皇南大塚의 構造와 新羅 積石木槨墳의 變遷·起源」『第1回 國立慶州文  
化財研究所 國際學術大會 皇南大塚의 諸照明』國立慶州文化財研究所  
チョヨンヂェ (조영제 趙榮濟) 2007『옥전고분군과 다라국』해안  
チョヨンヒョン (조영현 曹永鉉) 2002「皇南大塚과 天馬塚의 區劃築造에 대하여」『嶺南考古學』第31號  
バクヂョンイク (박종익) ほか 2010『국립경주문화재연구소 발굴조사성과 경주 쪽샘유적』국립경주문화재연구소  
바크젠일 (박진일 朴辰一) ほか 2014『慶州 瑞鳳塚 I (遺物篇)』日帝強占期資料調査報告 13輯, 國立中央博  
物館  
ハムスンソプ (함순섭 咸舜燮) 2010「皇南大塚을 둘러싼 論爭, 또 하나의 可能性」『황금의 나라 신라의 왕릉 황남대총』  
國立中央博物館  
ハムスンソプ (함순섭 咸舜燮) ほか 2010『황금의 나라 신라의 왕릉 황남대총』國立中央博物館  
文化財管理局 1975『慶州 皇南洞 98號古墳 發掘略報告』文化公報部 文化財管理局  
文化財管理局 1976『慶州 皇南洞 第98號古墳(南墳) 發掘略報告』文化公報部 文化財管理局  
ホンボシク (홍보식 洪漣植) 2013「고총고분의 봉분 조사 방법과 축조 기술」『삼국시대 고총고분 축조 기술』진인  
진  
リュジョンハン (류정환) ほか 2014『신라능묘 특별전 3 천마총 天馬, 다시 날다』국립경주박물관
- 

#### 図版出典

- 図1：シムヒョンチョル 2012  
図2：ハムスンソプ 2010  
図3～5：キムジョンギほか 1994  
図6：キムジョンギほか 1994 (一部加筆)  
図7～18：キムジョンギほか 1994  
図19：キムジョンギほか 1994 (一部加筆)  
図20：キムジョンギほか 1985 (一部加筆)  
図21～28：キムジョンギほか 1985

(専修大学文学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2017年3月23日受付, 2017年6月5日審査終了)



---

## **Burial Process of Wooden-chambered Cairns in Silla : Focusing on Hwangnamdaechong Tomb**

TAKAKU Kenji

This article analyzes the construction process and burial/funeral practices of Hwangnamdaechong Tomb in Gyeongju City, Gyeongsangbuk-do Province, South Korea, to provide a comprehensive picture of the burial process of large-scale wooden-chambered cairns in Silla in the fifth century and explain their characteristics and meaning. The analysis of Hwangnamdaechong Tomb indicates that the burial process of the large-scale wooden-chambered cairn was carried out in three stages. The first stage included the construction of the first burial mound and the main part of the tomb and the burial of the corpse along with grave goods. It is presumed that the wooden chamber, the cairn around the tomb, and the first burial mound were simultaneously constructed. Moreover, the soil profile of the first stage indicates that the construction was discontinued to inter the corpse. This suggests that large-scale wooden-chambered cairns fall into the category of concurrent interment tombs, where the corpse was interred under construction. In the second stage, the first burial mound was sealed. The soil profile of this stage shows that the construction was interrupted at the end of the stage to perform a ceremony and implies that the upper part of the first mound was considered important in the burial process. In the third stage, the second burial mound was constructed. It was the final stage of the tomb construction and funeral process. In the case of wooden-chambered cairns, the first burial mound had been completed when the corpse was interred, and therefore the burial and funeral rituals took place at a different place from that of typical preconstruction interment tombs, such as underground wooden-chambered tombs. The analysis of Hwangnamdaechong Tomb suggests that the corpses interred in its northern and southern burial mounds are unlikely to have been a married couple though they were certainly related to each other. It is therefore presumed that married couples were not generally buried together in Silla in the fifth century. Large-scale wooden-chambered cairns are considered as the final form of wooden-chambered tombs that emerged in the late Proto-Three Kingdoms period and as a top-ranked tomb for eminent figures. In particular, Hwangnamdaechong Tomb is much greater than others in terms not only of size of burial mounds and quality and quantity of grave goods but also of complexity in the burial process. The southern burial mound of Hwangnamdaechong Tomb implies the emergence of Silla kings' tombs, while the northern burial mound implies their establishment.

Key words: Wooden-chambered cairn, Hwangnamdaechong, burial process

---